

高寺遺跡発掘調査概要

1998年3月

富山県小杉町教育委員会

高寺遺跡発掘調査概要

1998年3月

富山県小杉町教育委員会

例 言

1. 本書は、富山県射水郡小杉町三ヶ字茶ノ木1597-8番地外に所在する高寺遺跡の発掘調査概要である。
2. 調査は、都市計画街路太閤山・稲積線道路改良事業に先立ち、小杉町都市計画課の依頼を受けて小杉町教育委員会が調査主体となり実施した。
3. 調査期間・発掘面積は次のとおりである。
試掘調査 平成8年8月5日～8月9日（延べ5日間）発掘面積 57㎡
平成8年9月4日～9月13日（延べ7日間）発掘面積 50㎡
本調査 平成9年4月18日～7月30日（延べ73日間）発掘面積 651㎡
4. 調査体制は、事務局を小杉町教育委員会におき、生涯学習課文化財保護係長古城久則が事務を担当し、生涯学習課長河畑 淳が統括した。調査は文化財保護係主任原田義範が担当した。
また作業員の確保には小杉町シルバー人材センターの協力を得、現地調査中は蓮王寺（上田晃道住職）に様々な便宜をはかっていただいた。
5. 調査にあたり、富山県教育委員会文化課、富山県埋蔵文化財センターから指導・助言をいただいた。また調査から本書の作成にあたり、次の方々からご教示を得た。記して謝意を表したい。（敬称略・五十音順）
池野正男・上野 章・上田晃道・久々忠義・京田良志・関 清・西井龍儀・林寺巖州・宮田進一・山内賢一
6. 木製品の樹種同定については、パリノサーヴェイ株式会社がを行い、その分析結果を掲載した。
7. 遺物整理及び本書の作成は原田が行い、遺物の注記はTKTと略号を記し、遺構の表記は次の記号を用いた。
井戸：SE、溝：SD、土坑：SK、不明遺構：SX、柱穴状ピット：P
なお（ ）内に略号番号が付されて表記しているものは試掘調査時の検出遺構である。
8. 本書で使用した遺構図の方位は磁北で、標高は海拔である。
9. 出土遺物及び記録資料は小杉町教育委員会（埋蔵文化財整理室）で保管している。

目 次

I 地形と周辺の遺跡	1
II 調査の経緯	2
1. 調査に至るまでの経過	
2. 平成8年度の試掘調査	
3. 平成9年度の本調査	
III 調査の概要	5
1. 立地	
2. 調査方法	
3. 層序	
4. 遺構	
5. まとめ	
附章 高寺遺跡から出土した木製品の樹種	41

挿図目次

第1図	地形と周辺の遺跡	1
第2図	本調査区割り図	3
第3図	試掘調査出土遺物	4
第4図	遺構配置図	6
第5図	SX03、SD26～29・40・53、SK30、P1～8遺構図	13
第6図	SE01、SK19・51遺構図	14
第7図	SD20・35、SK34遺構図	15
第8図	SD01遺構図	16
第9図	SK63～69・72・74・75、SE70、SD62・71・73遺構図	17
第10図	SK05・06・09・10・12～18・21・38・39・48遺構図	18
第11図	SK23・31～33・36・37・41・42・44・47・49・55、SD56遺構図	19
第12図	SK07・22・24・43・45・46・57～59・61、早桶01～05・07遺構図	20
第13図	江戸時代の骨壺の出土位置図	21
第14図	SE01出土遺物	22
第15図	SE01出土遺物	23
第16図	SD01出土遺物	24
第17図	SD01出土遺物	25
第18図	SD01出土遺物	26
第19図	早桶04出土遺物	27
第20図	早桶03～06出土遺物	28
第21図	早桶07出土遺物	29
第22図	早桶07、骨壺No.28出土遺物	30
第23図	骨壺No.3・5・22・24・26・29出土遺物	31
第24図	骨壺No.9・14・18・21出土遺物	32
第25図	包含層出土遺物	33

表目次

第1表	出土遺物観察表	34～39
-----	---------	-------

写真図版

図版1 試掘調査(1・2トレンチ)、発掘区全景

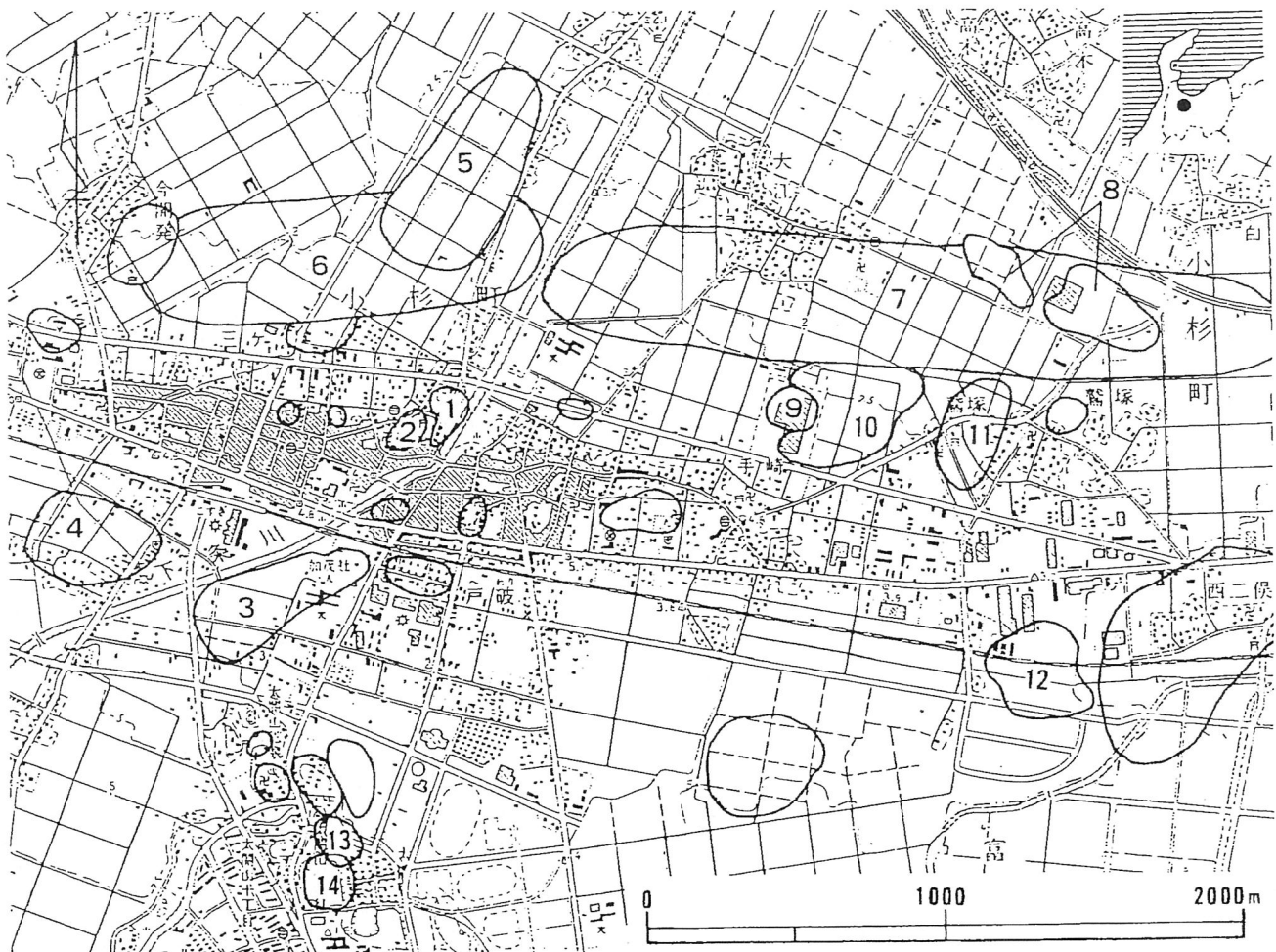
図版2～5 本調査遺構

I 地形と周辺の遺跡

高寺遺跡は、射水郡小杉町三ヶ地内の標高3.0~4.6mの下条川左岸の射水平野に立地する。射水平野は、庄川と神通川の大川に挟まれた地域で、この地域を流れる下条川・和田川・神楽川・鍛冶川など中小河川によってもたらされた土砂の堆積により形成された沖積平野である。この平野は、縄文時代前期初め約6,000年前には気候の温暖化により海面が上昇し、現在の海拔5mあたりが海岸線であったが、縄文中期（5,000~4,000年前）頃からの寒冷化により弥生時代後期（2・3世紀）には海水面が現在より5~10m程低下し、海岸線は1km程沖合いになり、飛鳥時代（6世紀）から次第に海水面が上昇しはじめたとされている [久々1997]。

白石・伊勢領・針原東・戸破若宮遺跡からは、縄文時代中期以降の石器や土器が若干出土しているが、住居跡などの遺構は見られない。集落跡が確認されるのは、弥生時代後期から古墳時代初期にかけてで、この頃から低湿地中の生活に適した場所を選び住み始めたと考えられる。

この時期の平野部の集落遺跡は下条川沿いの微高地に位置し、上流から干田・二の井・伊勢領・加茂社・愛宕・HS-04遺跡などが点在している。高寺遺跡は昭和初期頃の下条川改修時に、弥生時代後期末の壺が出土したことから知られるようになった。これらの遺跡は中世以降の集落跡と重複する 경우가多く、平野部の遺跡の分布から、前述の海進後退の影響を強く受けながら継続的な人々の生活が営まれていたことが窺える。



第1図 地形と周辺の遺跡 (1/25,000)

1. 高寺遺跡
2. 十社宮遺跡
3. 加茂社遺跡
4. 伊勢領遺跡
5. 愛宕遺跡
6. HS-03遺跡
7. HS-04遺跡
8. 白石遺跡
9. 戸破若宮遺跡
10. 戸破若宮東遺跡
11. 鷺塚村中遺跡
12. 針原東遺跡
13. 中山中遺跡
14. 中山南遺跡

Ⅱ 調査の経緯

1 調査に至るまでの経過

高寺遺跡の発見は古く、昭和34年発行の小杉町史に昭和初期の下条川改修にあたり、三ヶ高寺地内の蓮王寺東北地点の地下2米のところで幾つも完全出土したと記され、そのうちの壺が地元の朽木堅太郎氏所蔵として写真掲載されている。この弥生後期の壺は、現在蓮王寺に保管されている。

蓮王寺境内の東側を沿うように南北には現在の太閤山・稲積線は、大正末期頃まではなく北陸道から蓮王寺へ向かう参道として寺の入り口まで続く道であった。江戸時代の様子を記した絵図では、小杉新町から愛宕や稲積に向かう道は十社宮の境内北側から蓮王寺の東側を通り抜けている。大正期に蓮王寺敷地東に隣接した水田で道路用地部分の登記変更がなされているため、このころに取りつけられた道と考えられる。

この太閤山・稲積線は、太閤山団地と旧市街地を結ぶ重要な路線と位置づけられ、昭和34～42年度までに太閤山環状線から主要地方道富山高岡線（旧8号線）までの延長約960m区の改良が行われ、残る小杉北部線までの約540mの拡幅改良区間が、昭和59年5月幹線都市計画街路太閤山・稲積線（富山高岡広域都市計画道路事業）の決定がなされた。当初は昭和59年12月から昭和64年3月までの施工計画であった。しかし、下条川改修との調整や墓地移転先の代替地の選定などに歳月が費やされ、着工に至った昭和60年5月から13年間を要している。

高寺遺跡にかかる工事区間は、平成8～9年の実施予定となり、前年に町都市計画課と遺跡の取り扱いについて協議を行い、平成8年度他所で予定していた本調査と墓地などの移設の進捗状況を勘案しながら、試掘調査を実施することを確認した。

2 平成8年度の試掘調査（第2図）

試掘調査は墓地の移設の進捗状況に合わせて2期に分けて実施し、いずれも道路計画線の西側溝工事部分に沿って南北に幅約1.5mのトレンチを設定した。

第1期調査は8月5日から9日までの5日間で実施し、発掘面積は約57㎡である。1トレンチは寺敷地であった南側境界線から1.5m北に向かった所から掘削を開始し、北へ37mの地点まで進めた。対象地の1トレンチ設定箇所は、境内のコンクリート舗装がされていた部分であったため、バックホーで除去後人力により遺構の検出を行った。

遺構は、土坑2基、溝1条、平安時代の井戸1基のほか骨壺3個体が確認された。

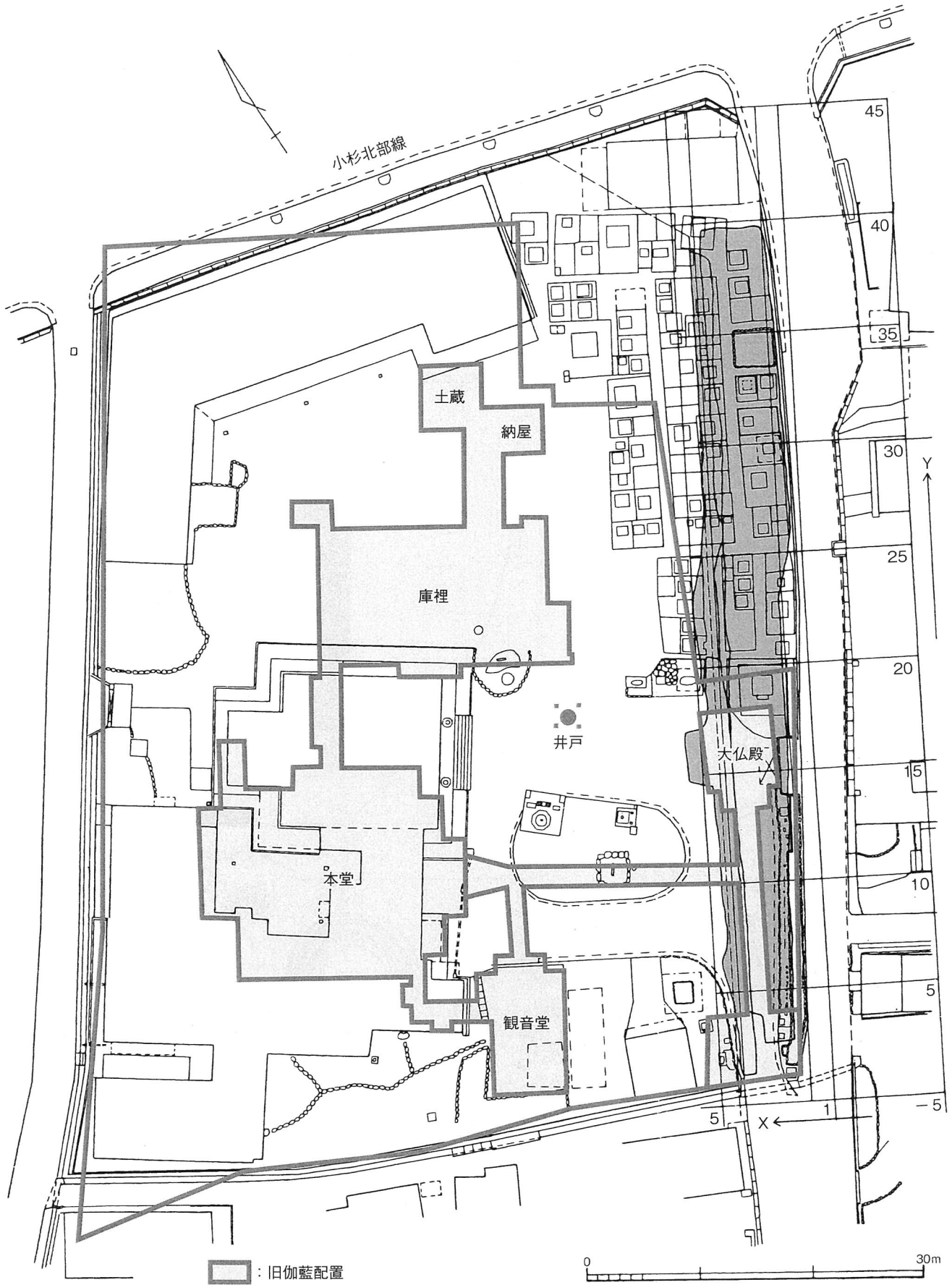
井戸からの出土遺物には、完形の土師器の坏・甕、須恵器の坏・坏蓋・広口壺・双耳瓶、緑釉陶器などの土器と櫛・柄杓・曲げ物桶の底板などの木製品がある。

第2期調査は9月4日から13日までの7日間で実施し、発掘面積は約50㎡である。2トレンチは1トレンチ北端から36.5mの南家墓地跡までである。2トレンチの設定区域は寺院内の墓域にあたり、蓮王寺の敷地内でもっとも高い標高4.62mの箇所、1トレンチ南端と2トレンチ北端側の最も高い地点との比高差は70cm程となる。

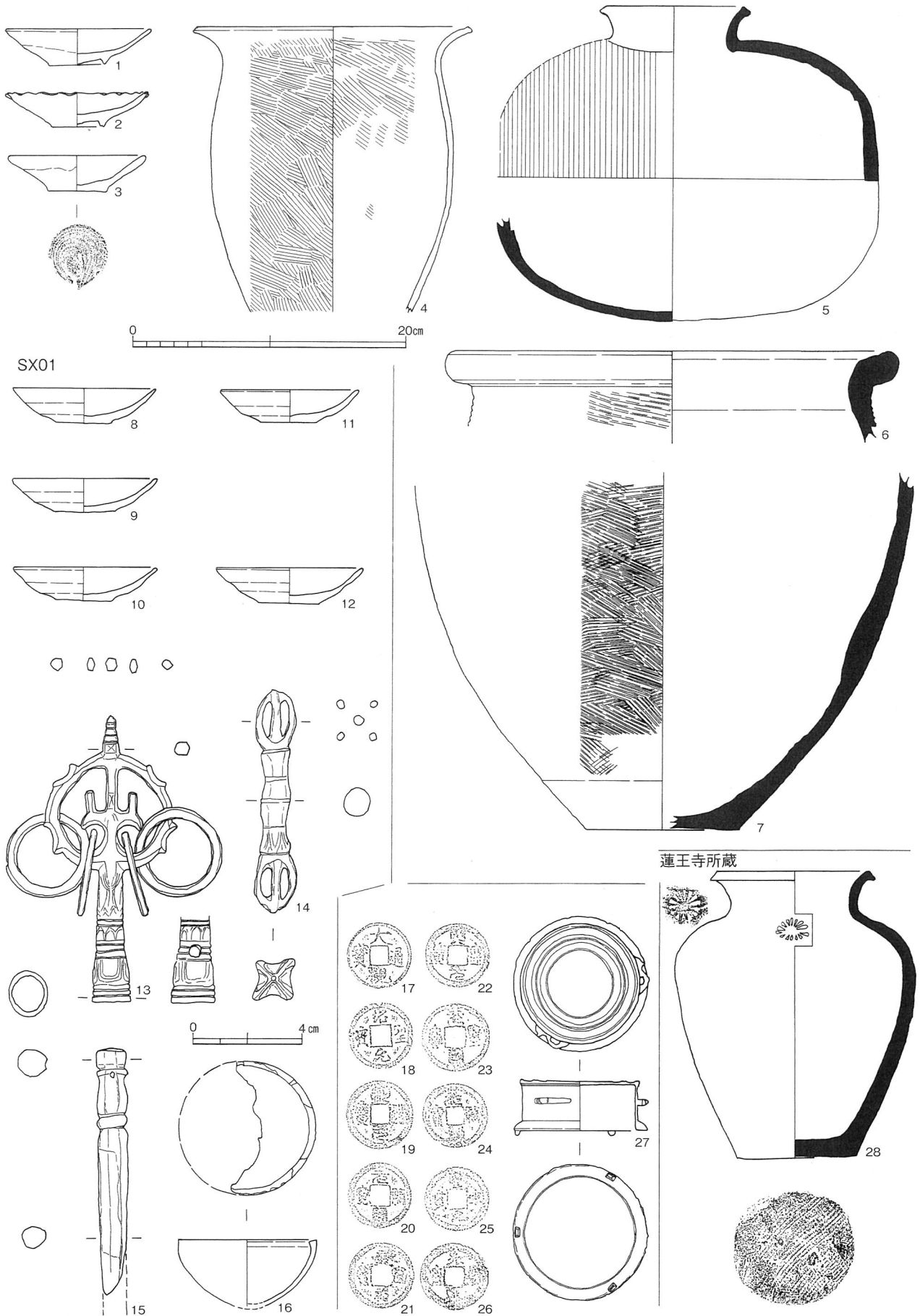
遺構は土壇、杭列、溝、礫散布箇所などを確認した。出土遺物は蔵骨器に用いられた珠洲の壺や江戸時代の骨壺・皿・小壺・小円盤（小壺蓋）・古銭・伏鉦などがある。また2トレンチの北端付近は、江戸末期以降の蓮王寺の墓所であったとされ、土壇の底面から錫杖・五鈷杵・皿・折敷などが一括して出土している。

3 平成9年度の本調査（第4図）

平成8年10月、試掘調査結果をもとに行われた町都市計画課との協議では、次年度が都市計画街路事業の最終年度であるため、平成9年度の当初で調査を終えた後ただちに工事に着手したい旨の要望が出された。これを受け町教委では、平成7～9年度まで継続調査となっていた事業との調整を図り、高寺遺跡の本調査は平成9年4月から6月末までに終了する予定とした。しかし、調査は複雑な遺構が多数検出され、1か月遅れの7月30日に終了した。



第2図 本調査区割り図 (1/500)



第3図 試掘調査出土遺物
 1トレンチ (4・6) 2トレンチ (左以外全て)

Ⅲ 調査の概要

1 立地

遺跡は下条川左岸の平野部に位置する。対象地の現況は、寺の境内地・墓地と道路で標高は3.8～4.6mである。調査区から東側へ約30m離れて流れる下条川までの間は、現在民家などが立ち並んでいるが、河川改修以前には多くの水田や畑地が残っていて、発掘区との標高差は少なくとも1m以上となっていた。対象地はこのような川沿いの微高地上に立地している。

2 調査方法

調査の区割りは、蓮王寺と道路改良区域の境界線を南北軸の基本とし、東に50cm平行移動した南北ラインをX軸とし、東西方向をY軸に据えた。この南北ライン上には10m間隔を基本に基準杭を設け、東側へ6m平行移動した地点にも基準杭を設置した。また2m四方を1区画とするグリッドを用いて遺物の取上げを行い、遺構の実測は20分の1を基本に遣り方測量で行った。なお、調査はバックホーで移転後の墓地基礎材や攪乱された土砂の一部を撤去し、その後人力でくり石やコンクリート塊を除去しながら、発掘区北側から南側へと進めた。

3 層序

層序は、上層からⅠ層褐色の表土(30～60cm)、Ⅱ層暗茶褐色土(20～40cm)、Ⅲ層明茶褐色土または黄褐色土(10～20cm)、Ⅳ層明黄褐色の地山となる。X40Y2～4区から北側は地山面がしだいに低くなり、青灰色シルト質土の地山となる。発掘区東側のX26～40Y2区で検出したSD01は黒褐色土が80cmほど堆積し、底面では青灰色シルト質土の地山となっている。

4 遺構

(1) 弥生時代の遺構

遺構は溝1条・土坑2基・不明遺構1基で、いずれの遺構の覆土も黒褐色土であった。

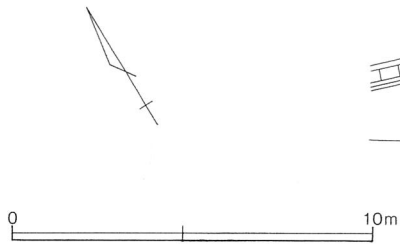
SD53 (SD02) (第5図・図版2-2) 溝は調査区内のX14・15Y2～5区を東西方向にわずかな弧を描くように伸びる。溝の幅は最大で3.6m、最小で2.8m、深さ42cmである。溝の断面形は逆台形状をなし、溝は南側がなだらかで、北側は傾斜がきつく掘り込まれ、幅1.0～2.1mある底面はほぼ水平となっている。一見すると周溝の形態に類似するが、この溝に相対すると考えられる発掘区南側には、溝の続きは検出されなかった。溝の覆土は、上層に炭化物の多く混じる暗茶褐色土が入り、次に暗黒褐色土、下層に暗灰褐色土が堆積している。

遺物は最下層の溝底面から弥生土器の壺片が十数点ほど出土し、中層と上層には壺のほか甕・高坏などがまとめて出土している。また上層からは数点の須恵器の甕と土師器の甑把手なども出土している。

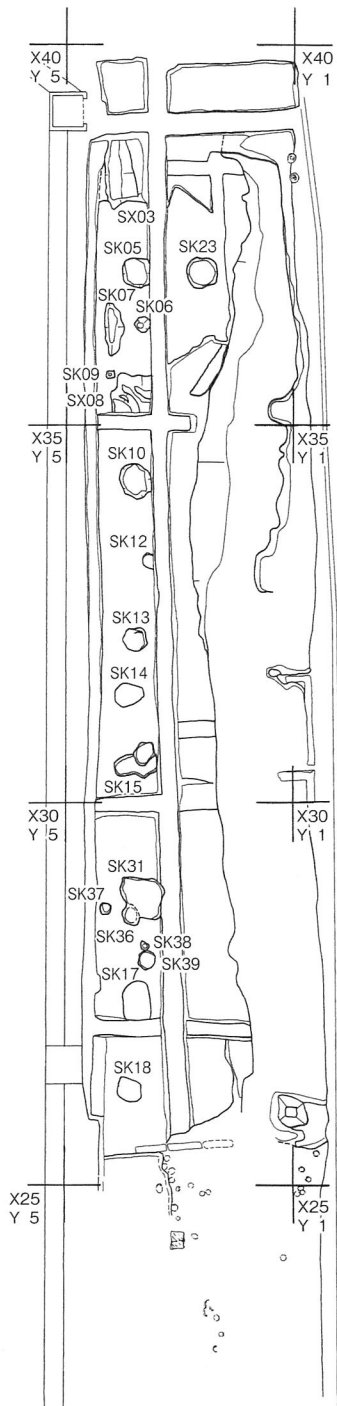
SK52 (第4図) 土坑はX16・17Y2区に位置する。上部が攪乱を受け底面が部分的に遺存しているため、不定形となっている。覆土は上層に5～20cmほど暗黒褐色土が入り、下層に炭化物の混じる暗茶褐色土が約0～20cm堆積する。出土遺物にはほぼ完形の赤彩の壺が1点出土している。

(SK04) (第4図) 土坑は試掘調査により確認されX11・12Y5区に位置する。直径約1.5mほどの円形と推定されるが、2/3ほどが調査区外へ広がるため未掘である。遺構は表土直下で検出され、覆土には炭化物混じりの暗黒褐色土が入る。深さは15cmほどで底面となる。遺物はSD53の遺物と接合する1個体分の甕や、5個体分の壺底部などがまとめて出土している。

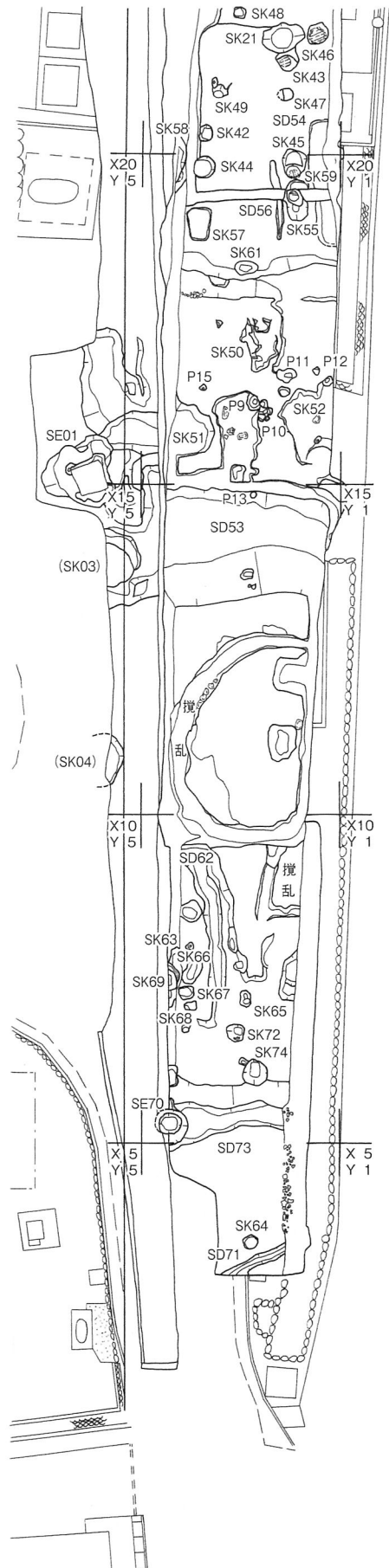
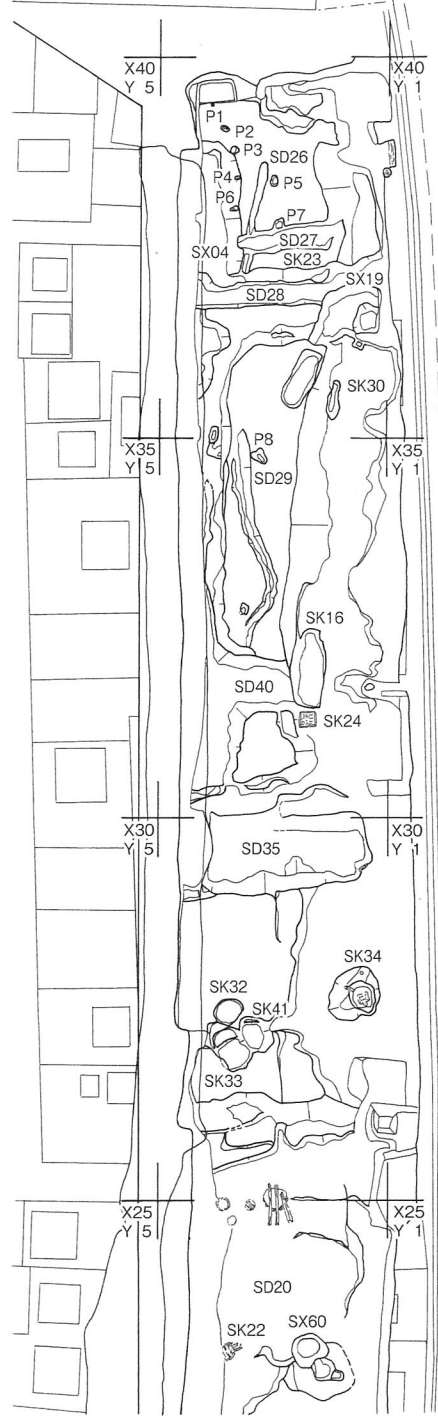
SX03 (第4図・図版2-1) 遺構はX38・39Y4区に位置し、SD27・28に新しく切られる。遺構平面は西側が調査区外、南側が前述の溝に切られはつきりしない。SD28から北へ3.6mまでが地山から30cmほど掘り込まれ、北端が「L」字状のコーナーにあたる。底面はほぼ水平で、完形の鉢が正位状態で1点出土している。遺構全形は判然とし



(X40~23区 1次検出遺構)



(X40~23区 2次検出遺構)



第4図 遺構配置図 (1/200)

ないが住居跡の可能性も考えられる。

(2) 古代の遺構

遺構は土坑1基、井戸1基である。

(SE01) (第6図・図版1-2) 井戸は試掘調査の1トレンチで確認され、X15・16Y5区に位置する。構造は2.4×2.0mの楕円形に深さ40cmまで掘り込まれ、この中央に一辺約1m、深さ1.18mまで方形の井戸筒を設け、四方の井壁はほぼ東西南北の方位となっている。底面の標高は1.92mの高さである。底面から高さ0.6mまでは、素掘りの井壁保護のため一辺95cm、厚み約1cmほどの方形に組まれた側板が埋設されていた。また方形井戸筒の四隅上端から側板上端の深さまで、直径20~35cmの柱穴状の土坑が掘り込まれていた。

遺物は楕円形部、井戸筒内、底面、柱穴状の土坑から須恵器(坏蓋・坏・壺類)、土師器(坏・皿・壺・鉢・甕)、緑釉陶器片などと、櫛・柄杓・桶底板などの木製品が出土している。特に土師器の坏は完形品4個体が重なった状態で出土したほか20数個体が出土している。また楕円形の掘り込みや井戸筒上層からは数点の弥生土器の出土がある。

SK51 (第4・6図) 土坑はX16・17Y3・4区に位置する。試掘調査で不定形な溝状遺構として確認され、今回西端を検出した。深さは0.2mあり、暗茶褐色の覆土上面から土師器(甕)が数点と須恵器が1点出土する。

(3) 中世の遺構

SD26 (第5図・図版1-5) X38・39Y3区に位置する南北方向の溝で、南端がSD27に新しく切られる。規模は幅0.18~0.20m、深さ0.06mで、覆土には炭化物混じりの灰褐色砂質土が入る。出土遺物はない。

SD27 (第5図・図版1-5) X38Y2・3区に位置する東西方向の溝で、東端はSD01の所で途切れ、西端が境内地へ続く。規模は幅0.55~0.70m、深さ0.05~0.10mで、覆土に暗茶褐色土が入る。出土遺物はない。

SD28 (第5図・図版1-5) X37・38Y2~4区に位置する東西方向の溝で、東端がSK19に新しく切られる。規模は2.0~3.5m、深さ0.5mで、断面形は逆台形状をなす。底面の北端から中央にかけて幅0.6m、深さ0.12~0.20mほどの溝がさらに掘り込まれる。覆土は大別して2層に分かれ、上層が灰白色土の小ブロックが混在する淡黄茶褐色土入り、下層は暗茶褐色土が堆積する。遺物の出土は下層からで、須恵器8点、土師器1点、中世土師器(皿)2点が出土している。

SD29 (第5図・図版1-5) 溝はX35~37Y2~4区に位置し、やや蛇行しながら南北方向に走る。規模は全長5.7m、幅0.24~0.50m、深さ0.08~0.25mである。覆土には暗灰褐色土が入り、中世土師器の皿が1点出土している。

SD35 (第7図・図版2-7) X30Y2~4区に位置する東西方向の溝で、西端は境内地へ続く。溝上端の幅は、最大幅2.8~3.7m、下端は0.6~1.0mあって、深さ0.8~1.0mであり、断面形が逆台形状となる。覆土は下層が暗灰褐色粘質土(40層下)で、中層は下層の堆積により底面がU字状になり、溝幅が狭まった時期の溝底面に埋まった赤茶褐色土(55層)、上層は浅くなった溝が徐々に埋まった細かい分層(20層下)となる。溝底のほぼ中央に東西に並ぶ杭を7本検出している。杭は一直線上に並ばず、間隔にもばらつきがみられ、西から0.95・0.35・0.30・0.30・1.20・0.15mとなっている。杭の中で4本が角材の転用である。一辺9~10cmの角材をそのままかまたは半分に分り、先端の4面を削り尖らせている。他の2本は直径24cm前後の丸太を4分割し、先端の4面を削り尖らせている。残る1本は直径8cmで、樹皮がついたままの木の先端を4・5面削り尖らせている。いずれの杭も下層上面で検出されている。

遺物は下層から須恵器(坏蓋・甕)、土師器(坏・壺・皿)、珠洲(すり鉢・壺)、中世土師器(皿)の小破片と板材2点が出土している。

SD40 (第5図・図版1-5) 溝はX32・33Y3・4区に位置する東西方向の溝で、東端がSD01まで途切れ、西端は境内地に続く。規模は幅1.4~1.5m、深さ0.3mほどとなる。覆土は上層が灰白色土ブロック混じりの明黄褐色土、中層が灰黄褐色土、下層は炭化物が多く混じった暗灰褐色土が入る。遺物は底面から円礫が1点出土している。

SK19 (第6図・図版1-5) 土坑はX37・38Y2区に位置し、SD01の底面で確認された。上径が0.75m、底径が0.45m、深さ0.9mの円筒形である。覆土は灰褐色土が入る。出土遺物には須恵器(甕)、土師器(壺・鉢)、中世土師器、木製品がある。

SK34 (第6図・図版1-5) 土坑はX28・29Y2区に位置し、SD01の底面で確認された。平面が0.80×0.65mの楕円形で、深さは0.8mあり、0.44mの深さの位置に土坑を塞ぐかたちで、縦31.5cm、横26.5cm、厚さ7cmの石塔の基礎石が置かれていた。遺物は石の上層から珠洲が2点出土し、石の下層から出土はなかった。また遺構図にある2本の杭はSD01に伴う遺物である。

SD62 (第6図・図版1-5) X7~10Y3・4区に位置する南北方向の溝で、南端がX7区で途切れ、北端がX10区で西へ曲がり少し続く。規模は幅0.8~1.0m、深さ0.1~0.2mで、東側が一段低くなる。覆土には灰色土が入り、出土遺物はすべて上層上面からである。遺物は中世土師器、砥石、珠洲、陶器がそれぞれ1点出土している。

(4) 近世の遺構

遺構は溝と埋葬施設の土壌がある。土壌には早桶、方形の棺桶、骨壺、焼骨をそのまま埋設したものなどがある。

SD01 (第8図・図版1-5、図版5-1~5) X27~40Y2・3区に位置する南北方向にはしる溝状の遺構で、東側の道路敷き部分が溝底のレベルからわずかに低くなったまま調査区外へ続くため、下条川に向かい徐々に低くなっているのか判然としない。平面がX34付近で最も広がり緩やかな弧を描く溝となる。南端はSD20と合流し南東へ続く。覆土の堆積からSD01がSD20よりもあとから埋まったと考えられる。深さは0.8~1.0mで北側がわずかに低くなる。溝の西側縁辺は、ほぼ平坦な底面から20~30度の緩やかな勾配となっている。

溝内にあたるX24~39Y1・2区の境内地と既存道路敷きの境を中心に長さ34m、幅0.5~2.5mの範囲に打ち込まれていた70数本の杭を検出した。木杭は最大径で12cm弱、最小径4cm弱となっていて、樹皮のついたままの杭とそれを半裁したもの、及び丸太杭、角材を転用した杭などがあり、大半の上端が腐食している。用途としては大別して境界線沿いに幾度となく打ち込まれた杭と、墓地造成時の地盤の補強に用いられたものが考えられる。

溝の覆土は上から1層が黒茶褐色土、2層黒褐色土、3層淡黒褐色土、4層青灰色シルト質土に大別され、1層が移転前の墓地造成時に入った近年の堆積で、4層土は少なくとも明治期以前まで湧水あるいは流水のあった頃の溝覆土と考えられ、2・3層土はそれ以降の堆積である。この堆積はX30以北では明確に区分されるが、以南からSD20までの間では、1・2層に墓地造成の影響を受けた堆積が見られる。

遺物は弥生時代から近現代まで幅広く出土しているが、かわらけ、乗燭、骨壺など江戸時代の埋葬に関連した土器類が最も多く、溝底面に堆積する4層から明治18年の命日を刻む石仏も出土している。

SD71 (第9図・図版5-7) 溝はX3Y2・3区に位置し東西方向にはしる。規模は幅0.30m、深さ0.25mである。覆土は暗灰褐色土で、遺物の出土はない。

SD73 (第9図・図版5-7) 溝はX4~6Y2~4区に位置し東西方向にはしる。規模は幅0.6~1.3m、深さ0.12mで、この溝を境にして南側は30cmほど低い地山となる。溝の西側はSE70に新しく切られ、東端は溝底面の高さが地山とほぼ同一のレベルとなる。覆土には暗黒褐色土が入り、底面から須恵器、土師器、珠洲、陶器などの小破片が出土している。

SK05 (第10図) X37・38Y3・4区に位置する平面形が隅丸方形の土壙である。上端の一辺が0.7m、下端が0.4m、深さ0.65mとなっている。覆土は上層に淡茶褐色土、下層に暗茶褐色土が入り、いずれの土からもわずかな骨片が確認できた。遺物は上層から須恵器(甕)、珠洲(甕・すり鉢)、かわらけが十数点出土している。

SK06 (第10図) X37・38Y3・4区に位置する平面形がほぼ円形の土坑である。規模は直径0.40m、深さ0.08mで、覆土に炭化物まじりの明黄茶褐色土が入る。出土遺物はない。

SK09 (第10図) X36Y 4 区に位置する柱穴状の土坑である。規模は直径0.23m、深さ0.40mで、覆土には茶褐色土が入り、わずかに骨片が混じる。遺物は礫が1点である。

SK10 (第10図・図版4-5) X35Y 3・4 区に位置する平面形が楕円形の土坑である。規模は長軸0.94m、短軸0.79m、深さ0.16mで、覆土には暗茶褐色土が入り、わずかに骨辺が混じる。遺物は寛永通宝2枚と鶏形をした土製品が1点出土している。

SK12 (第10図) X34Y 3 区に位置する平面形が隅丸方形の土坑である。規模は一辺が0.35mほどで、深さ0.25mである。覆土には茶褐色土が入り、骨片が混じる。出土遺物はない。

SK13 (第10図・図版4-6) X33Y 3・4 区に位置する平面形がほぼ円形の土坑である。規模は直径0.62m、深さ0.16mで、覆土には炭化物混じりの茶褐色土が入る。遺物は珠洲が1点、かわらけ、骨壺片、寛永通宝が15枚出土している。

SK14 (第10図・図版4-4) X32Y 3・4 区に位置する平面形が楕円形の土坑である。規模は長軸0.78m、短軸0.66m、深さ0.12mである。覆土は茶褐色土で黄褐色土小ブロックが斑状に混じっている。遺物はかわらけが1点と寛永通宝6枚が出土している。

SK15 (第10図・図版4-7) X31Y 3・4 区に位置し、不定形な土坑に新しく楕円形の土坑が掘り込まれる。楕円形土坑の規模は長軸0.64m、短軸0.49m、深さ0.20mである。覆土は茶褐色土で骨片が多く混じる。遺物は覆土上面から須恵器が2点、珠洲が3点出土し、底面付近から寛永通宝が5枚出土している。

SK16 (第10図) 土坑はX32Y 3 区に位置し、東側は近年の墓地造営により攪乱されて明確でない。覆土は淡黒褐色土でSD01の覆土に類似し、骨片がやや多く混じる。遺物は骨壺、蓋片のほか須恵器、珠洲が数点出土している。

SK17 (第10図) X28Y 3・4 区に位置する平面が楕円形の土坑である。規模は長軸0.93m、短軸0.79m、深さ0.27mである。覆土には明黄褐色土が入り、炭化物と骨片がやや多く混じる。遺物は覆土上面から骨壺、須恵器が数点出土し、底面から寛永通宝が2枚出土している。

SK18 (第10図) X27Y 4 区に位置する平面が楕円形の土坑である。規模は長軸0.73m、短軸0.60m、深さ0.19mである。覆土には暗黒色土が入り、板片が多く混じっていた。遺物にはSD01から出土した破片と接合する珠洲の壺片が1点出土している。

SK21 (第10図) X22Y 2・3 区に位置する平面が楕円形の土坑である。規模は長軸1.30m、短軸0.87m、深さ0.75mである。覆土には淡灰褐色土が入る。遺物には越中瀬戸1点が出土している。

SK38 (第10図) X29Y 3 区に位置する平面が楕円形の土坑である。規模は長軸0.24m、短軸0.18m、深さ0.07mである。覆土には灰褐色砂質土が入り、覆土上面から須恵器の坏蓋片が1点出土している。

SK39 (第10図) X28・29Y 3 区に位置する平面がほぼ円形の土坑である。規模は直径0.50m、深さ0.07mである。覆土には淡黒褐色土と茶褐色土が入り、茶褐色の覆土から完形のかわらけ、磁器(碗)が各1点と寛永通宝が6枚出土している。

SK48 (第10図) X23Y 3 区に位置する平面がほぼ円形の土坑である。規模は直径0.44m、深さ0.23mである。覆土には上層に暗灰褐色砂質土、下層に青灰色砂質土が入る。出土遺物はない。

SK23 (第11図) X37・38Y 3 区に位置する平面がほぼ円形の土坑である。規模は直径0.80m、深さ0.15mである。覆土には明茶褐色土が入る。出土遺物はない。

SK31 (第11図) X29Y 3・4 区に位置する平面が方形の土坑で、一部がSK36に新しく切られる。規模は一辺約1.0mで、深さ0.4mである。覆土は暗茶褐色土が入り、須恵器と中世土師器の小破片が2点出土している。

SK32 (第11図) X27・28Y 3・4 区に位置する平面がほぼ円形の土坑で、SK33の一部を新しく切る。規模は直径

0.71m、深さ0.35mである。覆土は上層が茶褐色土、下層には骨片混じりの灰褐色土が入る。遺物はかわらけ1点、寛永通宝が5枚出土している。

SK33 (第11図) X27・28Y3・4区に位置する平面が楕円形の土壌である。規模は長軸1.48m、短軸0.87m、深さ0.40mである。覆土には上層が暗茶褐色土、下層には灰褐色土が入る。遺物は上層上面からかわらけ3点、底面付近から板材が1点出土している。

SK36 (第11図) X29Y4区に位置する平面が楕円形の土壌である。規模は長軸0.52m、短軸0.42m、深さ0.40mである。覆土には上層が淡黒褐色土、下層には黄褐色砂質土が入る。出土遺物はない。

SK37 (第11図) X29Y4区に位置する平面がほぼ円形の土壌である。規模は直径0.31m、深さ0.10mである。覆土は上層が灰褐色土、下層には黄褐色砂質土が入る。遺物は2層上面からかわらけ1点が出土している。

SK41 (第11図) X27・28Y3区に位置する平面が楕円形の土壌である。規模は長軸1.04m、短軸0.42m、深さ0.40mでSK33を新しく切る。覆土には暗茶褐色土が入り、底面に桶の底板材が2点と板に乗った状態で寛永通宝が出土している。

SK42 (第11図) X21Y3・4区に位置する平面がほぼ円形の土壌である。規模は直径0.48m、深さ0.46mで覆土には上層が茶褐色土が入り、下層が灰褐色土となる。遺物は骨壺の蓋と珠洲(鉢)の小破片が出土している。

SK44 (第11図) X20Y3・4区に位置する平面がほぼ円形の土壌である。規模は直径0.65m、深さ0.25mで覆土には上層が茶褐色土が入り、下層が灰褐色土となる。遺物は骨壺の蓋と珠洲(鉢)の小破片が出土している。

SK47 (第11図) X21Y2区に位置する平面が楕円形の土坑である。規模は長軸0.48m、短軸0.39m、深さ0.10mで覆土には灰褐色土が入り、礫が2点出土している。

SK49 (第11図) X21・22Y3区に位置する平面がほぼ円形の土壌である。規模は直径0.42m、深さ0.27mで覆土には灰褐色粘質土が入り、底面から早桶の底板が炭化したと考えられる1.5~2.0cmの厚みの黒色層が見られた。またこの土壌は地山を垂直方向に掘り下げず、斜め30度ほどに掘り込まれている。出土遺物はない。

SK55 (第11図) X20Y2区に位置し早桶を埋葬した土壌1基と、これを新しく切る土坑を1基を確認した。土壌の規模は上径0.50m、下径0.34m、深さ0.50mで底面に直径30cmの早桶底板の半分が残存していた。覆土には暗青灰色粘質土が入り、底板以外の出土遺物はない。新しい土坑は上径0.65m、下径0.22m、深さ0.76mで断面形が台形状となる。覆土には青灰色土ブロックが多く混じっていた。出土遺物はない。

SK07 (第12図) X36Y4区に位置する平面が楕円形の土坑で、西側が8年度調査区となる。規模は長軸1.42m、深さ0.20mで覆土には明黄褐色土が入り、出土遺物は礫が1点である。

SK22 (第12図) X24Y4区に位置しSD20の溝底面で検出した早桶である。土壌の掘り方は不明確で、SD20の底面を掘り下げた時に早桶の側板上端が確認されている。早桶の規模は底板径44cm、側板の長さは最も遺存状態の良いもので40cmである。遺物は陶器片1点と蓋に「寺」の文字が書かれた漆椀が1対出土している。

SK24 (第12図・図版4-2) X32Y2・3区に位置しSD01の溝底面で検出した木棺で、土壌の掘り方は確認できなかった。木棺は底板の一边が約45cmで、四方の側板は6.8cmの高さまで遺存していた。いずれも腐食が著しく取上げの段階で破損し原形をとどめない。覆土には炭化物混じりの淡黒褐色土が入る。遺物は木棺脇の底面付近からかわらけの底部が1点出土している。

SK43 (第12図・図版3-6) X22Y2区に位置する平面がほぼ円形の土壌で、SK21に新しく切られる。規模は上径0.67m、下径0.34m、深さ0.40mで底面には直径27cm、厚さ1.2cmの早桶の底板が遺存する。覆土は上層が灰褐色土、中層が青灰色土、下層が暗灰褐色土となり、1層には川底の堆積に見られるような細かい灰色砂質土層が縞状に入る。遺物は底板が1点である。

SK45 (第12図) X20・21Y 2 区に位置する平面が楕円形の土壇で、SK59に新しく切られる。規模は長軸0.85m、短軸0.73m、深さ0.18mで覆土に木炭片や炭化物の混じる暗灰褐色土が入る。遺物は底面から板材に乗った状態で寛永通宝が出土している。

SK46 (第12図・図版3-7) X22Y 2 区に位置する平面がほぼ円形の土壇である。規模は上径0.67m、下径0.55m、深さ0.57mで底面から15cmの高さまで早桶底部が遺存している。覆土には上層下層とも暗灰褐色土が入り、遺物は副葬品のかわりけ2点、漆椀の完形品が2点、桶底面から出土している。

SK57 (第12図) X19・20Y 4 区に位置する平面がほぼ長方形の土坑である。規模は長軸1.07m、短軸0.70m~0.55m、深さ0.12mで覆土には暗灰褐色砂質土が入る。遺物は弥生土器、須恵器、近世磁器が出土している。

SK58 (第12図) X20・21Y 4 区に位置する平面がほぼ円形の土坑と考えられる。土坑の東端1/4程度を確認しているだけで全体の規模は不明である。覆土には炭化物混じりの暗黒茶褐色土が入り、上層に骨壺片、かわらけが混じる。

SK59 (第12図・図版3-5) X20Y 2 区に位置する直径0.45m、深さ0.75mの円筒形の土壇で、SK45を新しく切る。土壇底面には長さ約38cm、幅4.7cm、厚さ0.3cm前後の板塔婆が2枚十文字に組み敷かれ、その上に早桶が埋設されていた。早桶の底板は直径27cm、厚さ1.2cmで、側板が底面から10cmほどの高さまで遺存していた。覆土には暗灰褐色土が入り、下層では青灰色シルト質土ブロックが斑状に混在していた。板塔婆と早桶以外の出土遺物はない。

SK61 (第12図) X19Y 3 区に位置する平面がほぼ楕円形の土坑である。規模は長軸0.70m、短軸0.41m、深さ0.12mで覆土には暗灰褐色土が入る。出土遺物はない。

早桶01 (第12図) 早桶はSD20底面のX25・26Y 4 区で確認した。早桶の規模は底板径29.5cm、厚さ1.5cm、側板は最も遺存が良いもので底面から27.3cmほどの長さがある。覆土には暗灰褐色土が入る。出土遺物はない。

早桶02 (第12図) 早桶はSD20底面のX25Y 3 区で確認した。早桶の規模は底板径23.2cm、厚さ0.9cm、側板は最も遺存が良いもので底面から14cmほどの長さがある。覆土には暗灰褐色土が入る。出土遺物はない。

早桶03 (第12図・図版3-1、2) 早桶はSD20底面のX23Y 2 区で確認した。早桶の規模は底板径27.3cm、厚さ1.0cm、側板は最も遺存が良いもので底面から30.7cmほどの長さがある。覆土には暗灰褐色土が入り、覆土上面から早桶の蓋板(推定径35.0cm、厚さ0.30cm)と鋤を模した木製品や数珠玉が出土している。

早桶04 (第12図・図版3-1、4) 早桶はSD20底面のX23Y 2・3 区で確認した。早桶の規模は底板径35.2cm、厚さ0.9~1.3cm、側板は最も遺存が良いもので底面から48.1cmほどの長さがある。桶底板内面に九文字の梵字が墨書きされ、側板外面には梵字のほか「享保十四(1729)年芳安童子位 八月十四日」と書かれている。

早桶内の覆土は暗灰褐色土で、遺物は副葬品として鋤のミニチュア、折敷、櫛、数珠玉、漆椀などの木製品と寛永通宝が12枚出土している。

早桶05 (第12図・図版3-1) 早桶はSD20底面のX23Y 2・3 区で確認した。早桶の規模は底板径28.7cm、厚さ1.0cm、側板は最も遺存が良いもので底面から14.0cmほどの長さがある。早桶内の覆土は暗灰褐色土で、遺物は副葬品としての木製品や角材などが出土している。

早桶06 早桶はSD20底面のX25Y 2・3 区で確認した。早桶の規模は底板径29cm前後、厚さ1.1cmほどで側板は遺存しない。出土遺物はない。

早桶07 (第12図・図版3-1) 早桶はSD20底面のX25・26Y 3 区で確認した。早桶の埋設時に掘り込まれた土壇は確認できなかったが、早桶の南側半分には桶を支えるように長さ1m前後、直径約12cmほどの丸太を分割して作った5本の木杭が打ち込まれていた。そして埋設された早桶の上には、先を尖らせた加工はないが杭と似る3本の木材が載せられていた。杭は土壇掘削時に南側の水を含んだ軟弱な土砂が崩れるのを防ぐ役割、または早桶を埋納する際に崩れかけたため急遽打ち込まれたと考えられる。また早桶の上の3本の木材は、埋設時の道具として使用されたこと

も考えられる。早桶の規模は底板径43.8cm、厚さ1.8cm、側板の長さが74.5cmほどで上端はわずかに腐食するが、ほぼ完形とみられ厚さ0.6cm前後である。また側板外面には梵字が墨書きされるが、戒名や命日は書かれていない。

早桶内の覆土は暗灰褐色粘質土で、覆土中から桶の蓋板（直径55.9cm、厚さ0.6～0.8cm）と人骨、副葬品として木製の数珠玉、寛永通宝が2枚出土している。

埋葬施設

蓮王寺の江戸時代の埋葬施設は、大別して4種類に分けることができる。

【土壙】

円形の素掘り土坑で直径80cm前後が最も多く、直径30cmのものも数基確認した。埋葬当時の土坑深度は近代以降の墓地造営の影響を受け不明であるが、遺構検出面から約10～20cmほどで底面となる。X27～30・Y3～4区にかけて十数基確認され、底面付近から六道銭にあたる寛永通宝や越中瀬戸などの皿、泥面子（人形）などの副葬品が埋納されている箇所もある。

【円形木棺（早桶）】

土葬用の桶で江戸時代初期に多用されている。大人用の直径約60cmと子供用の直径約30cmの2種類が一般的といわれている。調査でも大小の早桶を15基確認した。副葬品には木製の櫛・鋤のミニチュア・漆器椀・数珠、越中瀬戸皿などがある。早桶の埋葬施設は、X20～25区に集中している。

【方形木棺】

SK24（第12図）は底板の一辺が45cmで側板の高さは遺存していないため全容は不明である。同様に推定される遺構を3基確認した。埋葬施設の区域にはまとまりはない。

【蔵骨器】

焼骨を壺に入れて埋葬する。調査では35基以上を確認した。大半の蔵骨器は無釉で素焼きの土師質土器である。蓋となる同質の皿、のど仏や歯を入れる小壺とその蓋となる円盤、または小型の皿がセットとなる。また、大甕に石蓋をのせた施設も1基確認した。副葬品には木炭・泥面子（商人をモチーフにした座像）・木製品などがある。

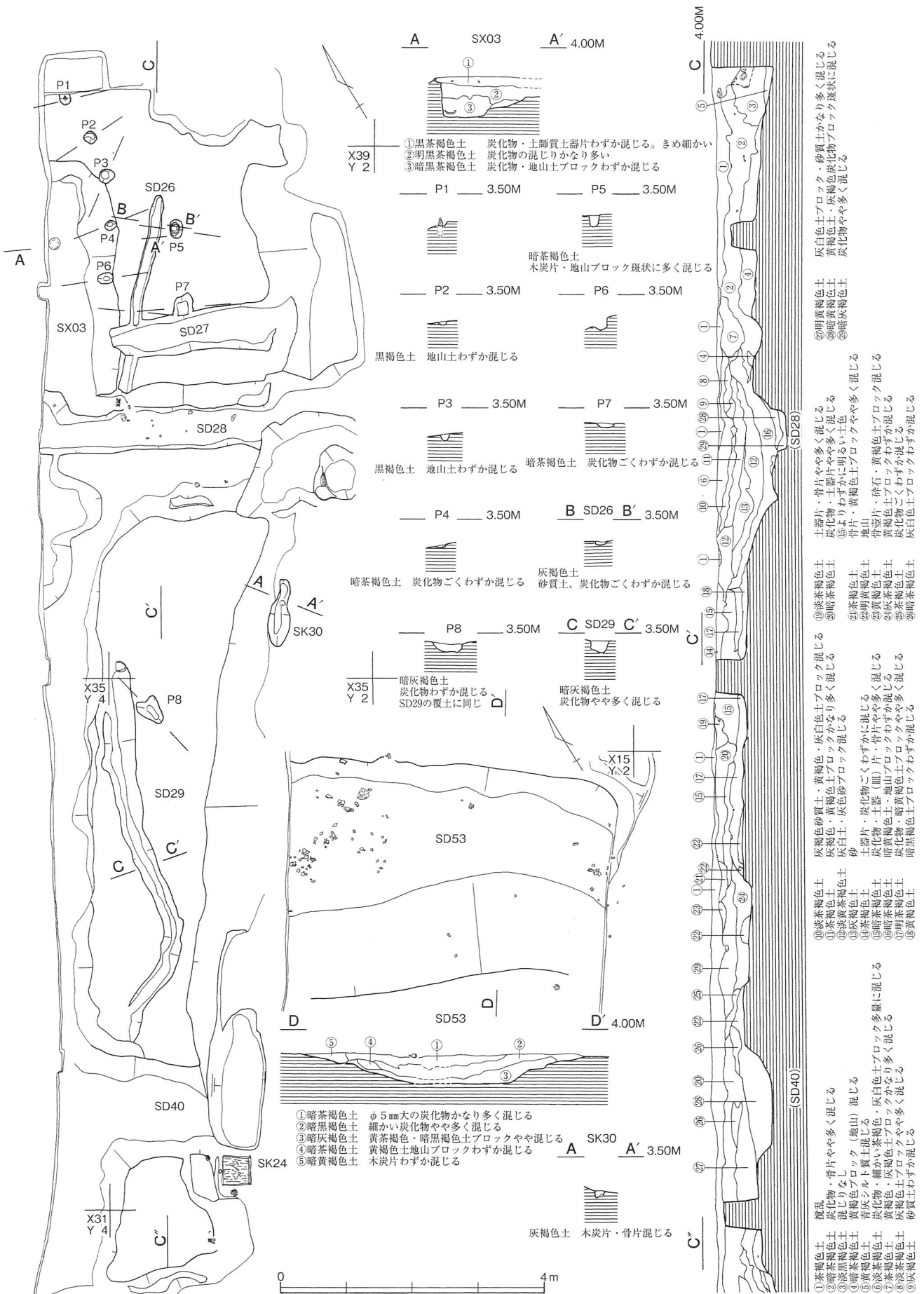
5 まとめ

今回の調査は、真言宗鷹尾山蓮王寺境内及び墓地の東端部の本調査であった。過去に幾度となく下条川の氾濫が起きていた地域で、左岸の微高地であったこの場所を選んで、弥生時代から人々が生活していたことが確認できた。特に平安期の井戸から出土した土師器の推定年代と、今後文献などの発見により創建時期や伽藍配置などが明確になれば、お釈迦様への^{あかみず}関伽水を汲む井戸（^{あかい}関伽井）であったことも確認される。また、江戸時代における真言宗寺院の墓制を解明する一助となった。

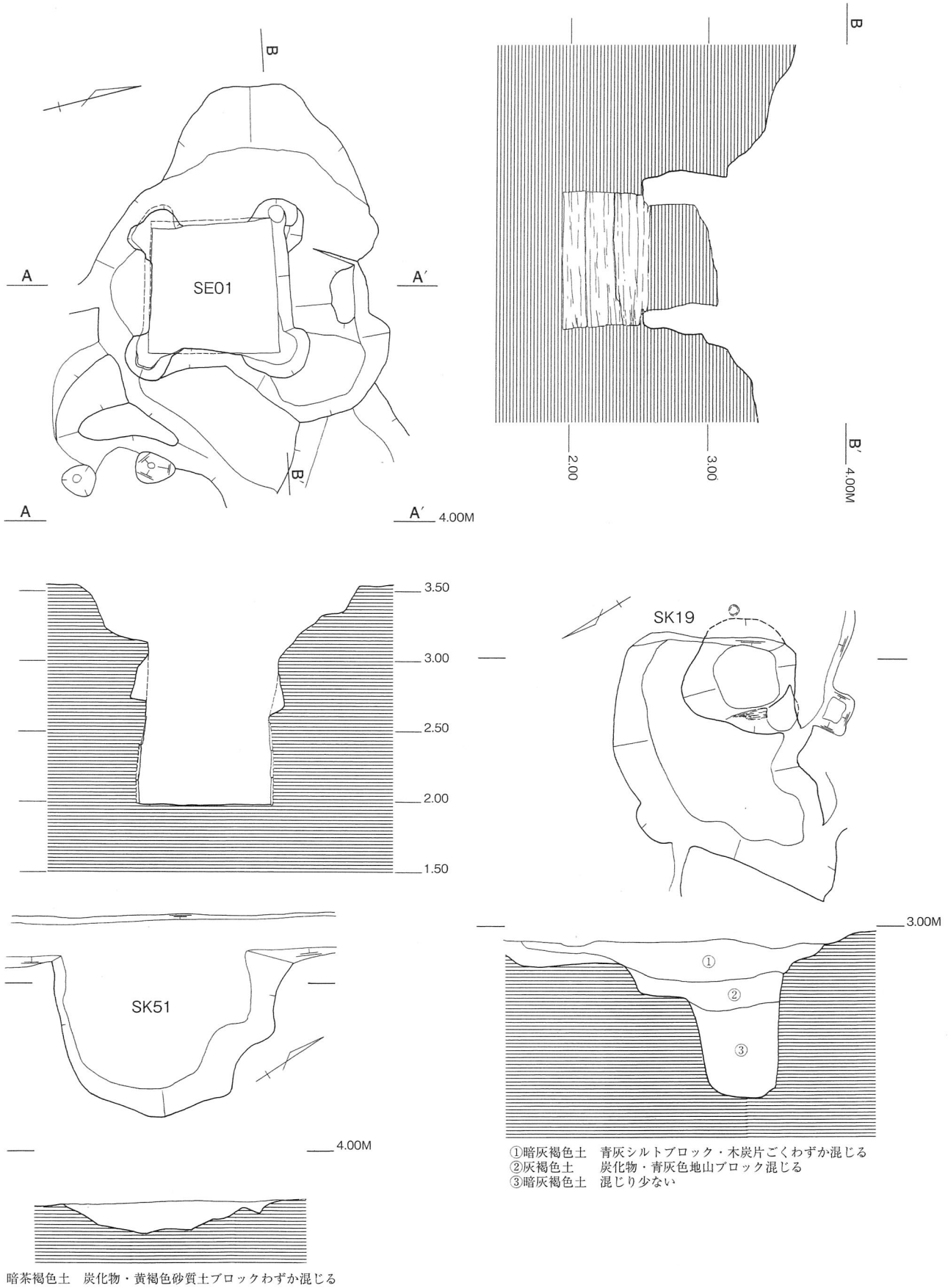
参考文献

小杉町 1997年 『小杉町史』

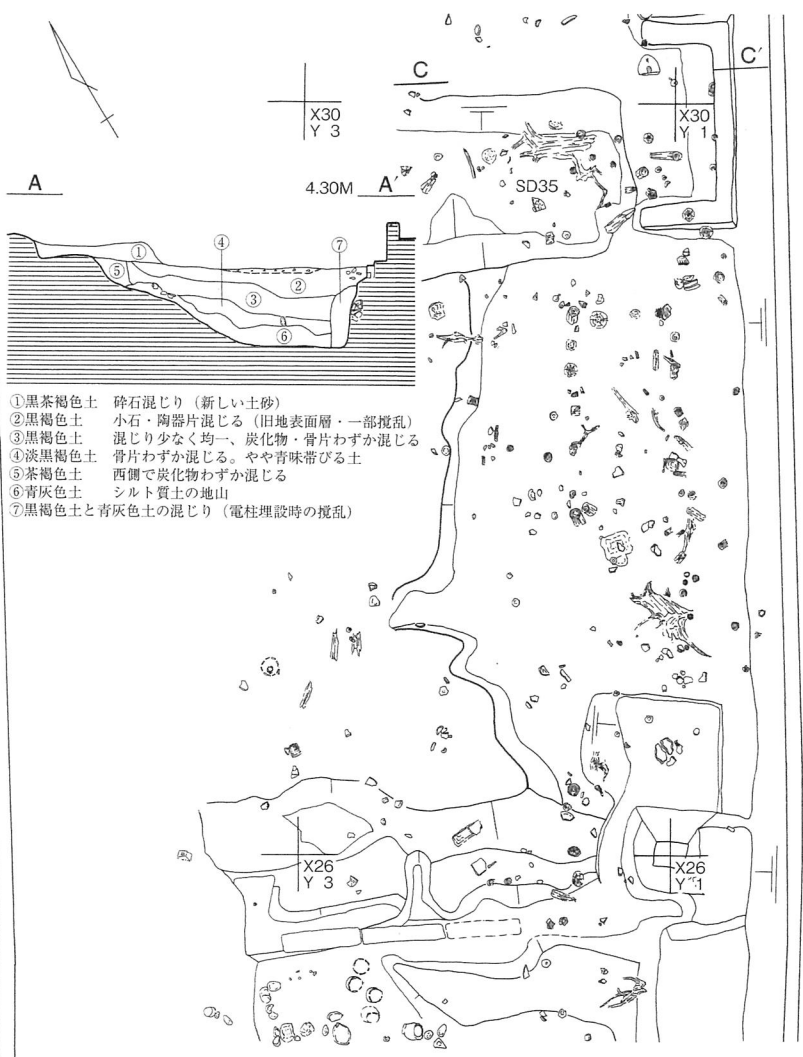
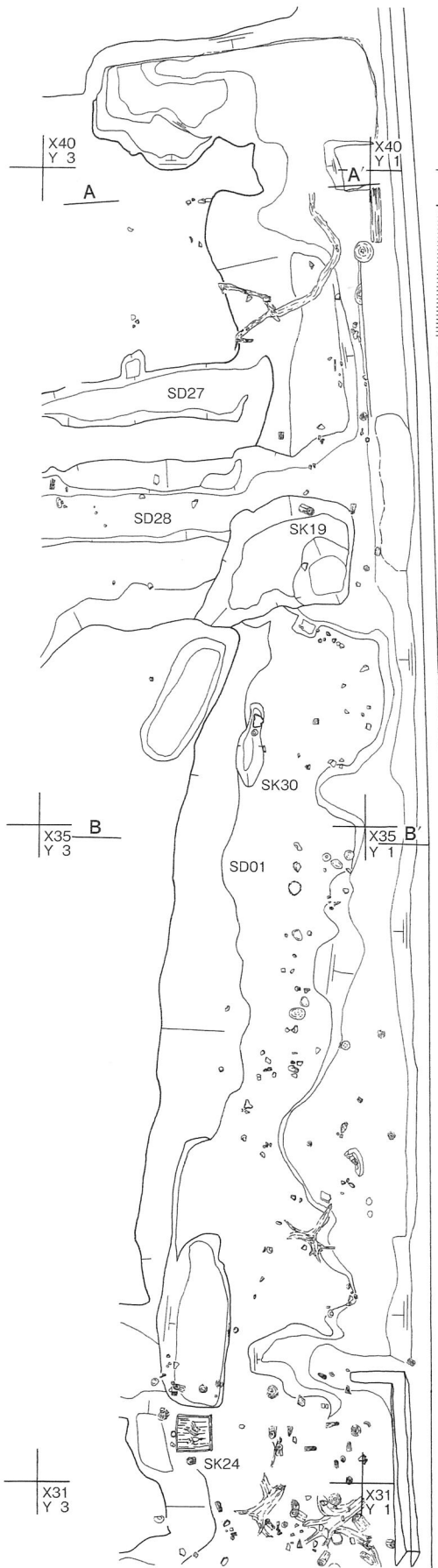
鷹尾山蓮王寺／高寺大仏奉賛会 1953年 『高寺大仏奉賛の栞』



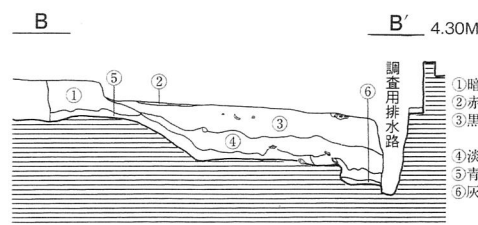
第5図 SX03、SD26~29・40・53、SK30、P1~8遺構図 (1/80)



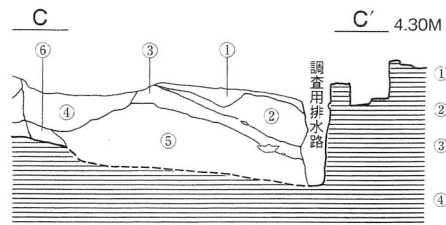
第6図 SE01、SK19・51遺構図 (1/40)



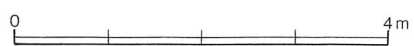
- ① 黒茶褐色土 碎石混じり (新しい土砂)
 ② 黒褐色土 小石・陶器片混じる (旧地表面層・一部攪乱)
 ③ 黒褐色土 混じり少なく均一、炭化物・骨片わずか混じる
 ④ 淡黒褐色土 骨片わずか混じる。やや青味帯びる土
 ⑤ 茶褐色土 西側で炭化物わずか混じる
 ⑥ 青灰色土 シルト質土の地山
 ⑦ 黒褐色土と青灰色土の混じり (電柱埋設時の攪乱)



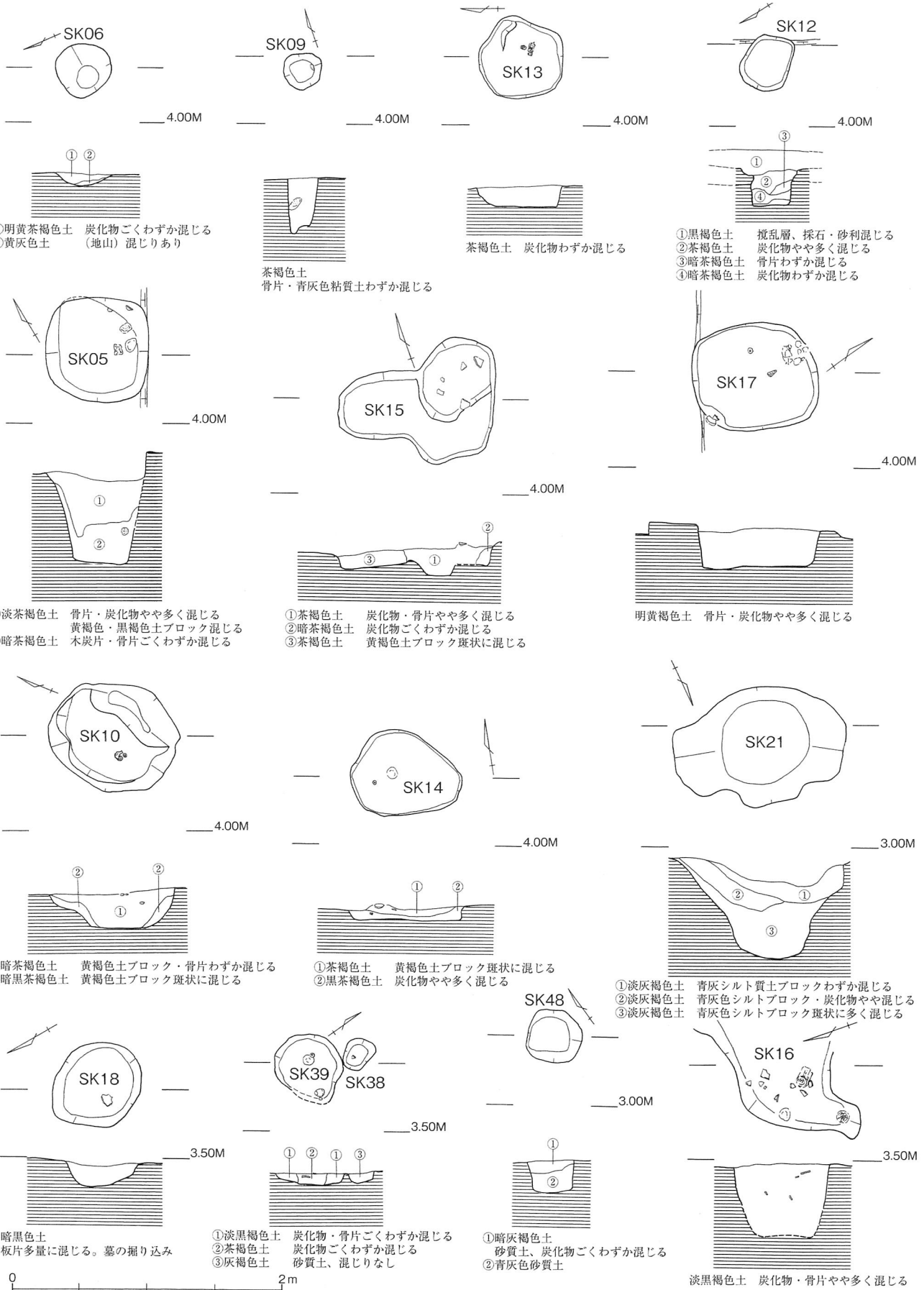
- ① 暗茶褐色土 炭化物やや多く混じる
 ② 赤茶褐色土 小石・砂の混じり
 ③ 黒褐色土 炭化物やや混じる。④層土ブロック斑状に混じる
 ④ 淡黒褐色土 炭化物・骨片ごくわずか混じる
 ⑤ 青灰色土 地山の新移層
 ⑥ 灰色砂層 木の実・種子混じる



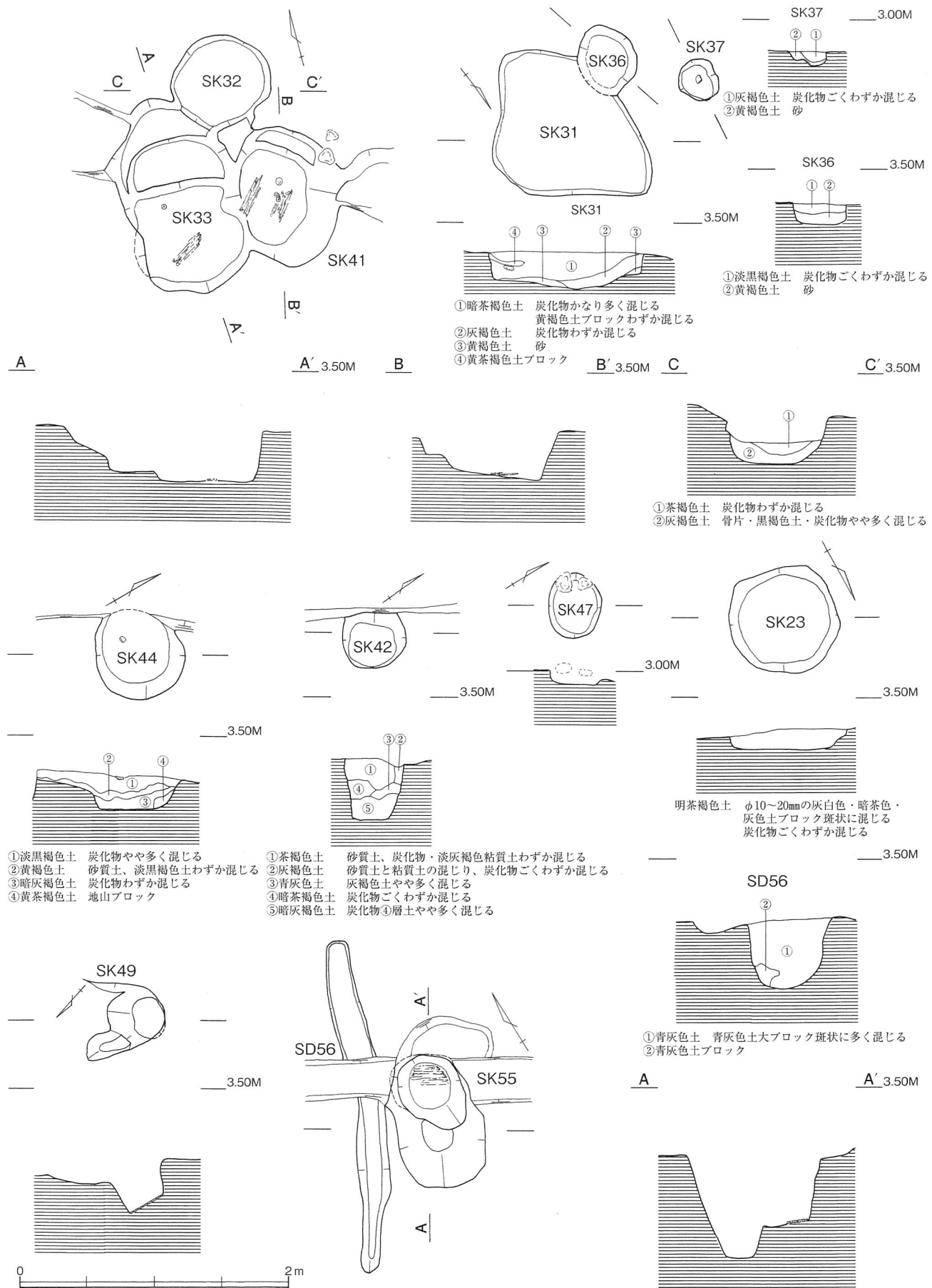
- ① 明茶褐色土 砂質土主体、やや粘質土混じる (盛土)。土器 (皿) 片混じる
 ② 淡灰褐色土 炭化物・木炭片やや混じる
 ③ 黒褐色土 墓地造営時の排土の堆積
 炭化物・木炭片やや多く混じる
 石造物破片・土器 (皿)・近代陶磁器片混じる
 ④ 茶褐色土 炭化物・骨片・土器 (皿) 片混じる
 土器取上げ時の茶褐色土と同質
 攪乱なし
 ⑤ 淡黒褐色土 炭化物・木炭片・骨片・陶磁器・珠洲混じる
 ⑥ 灰褐色土 灰褐色・黄褐色・淡褐色砂質土
 ブロック斑状に混じる
 木炭片わずかに混じる



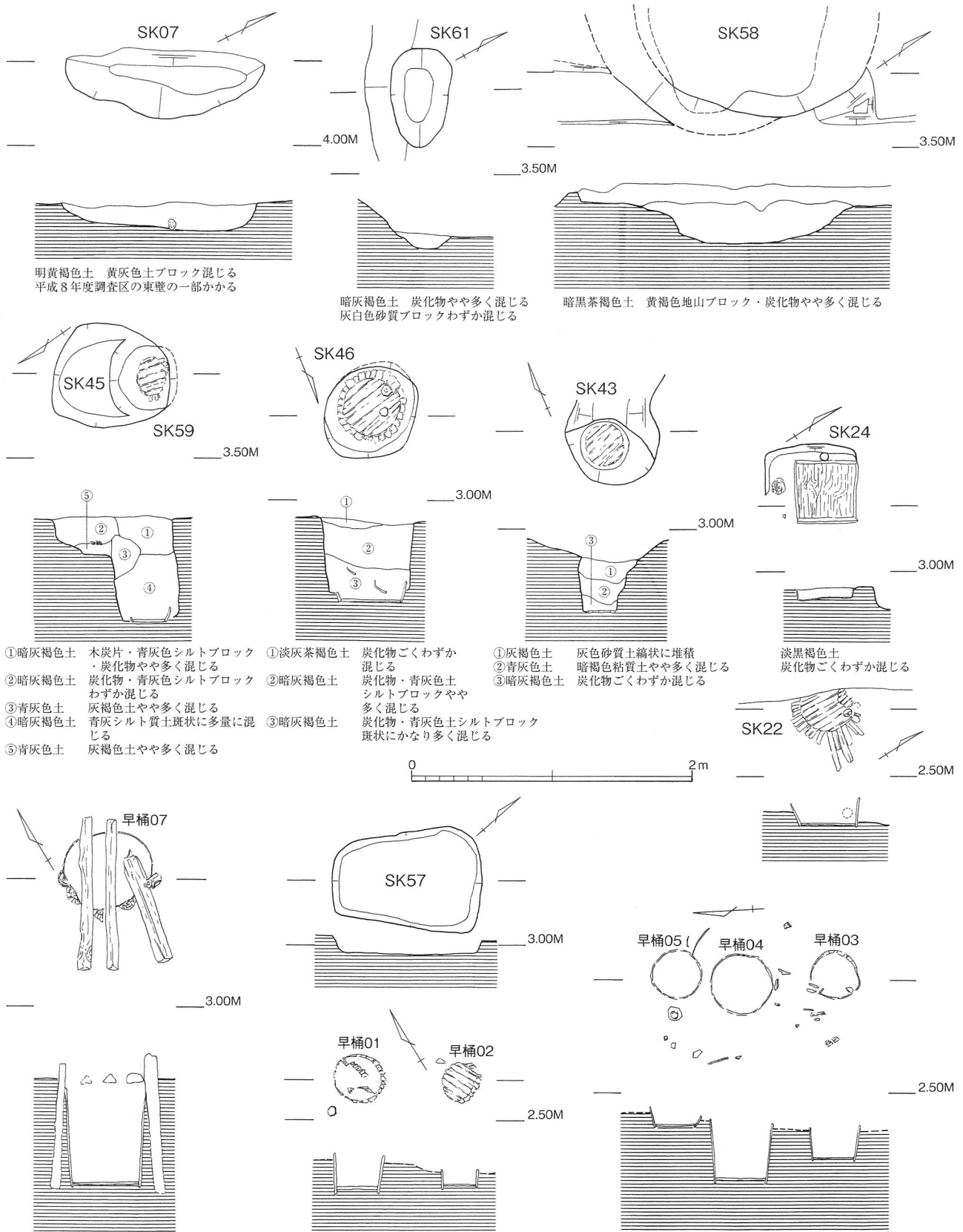
第8図 SD01遺構図 (1/80)



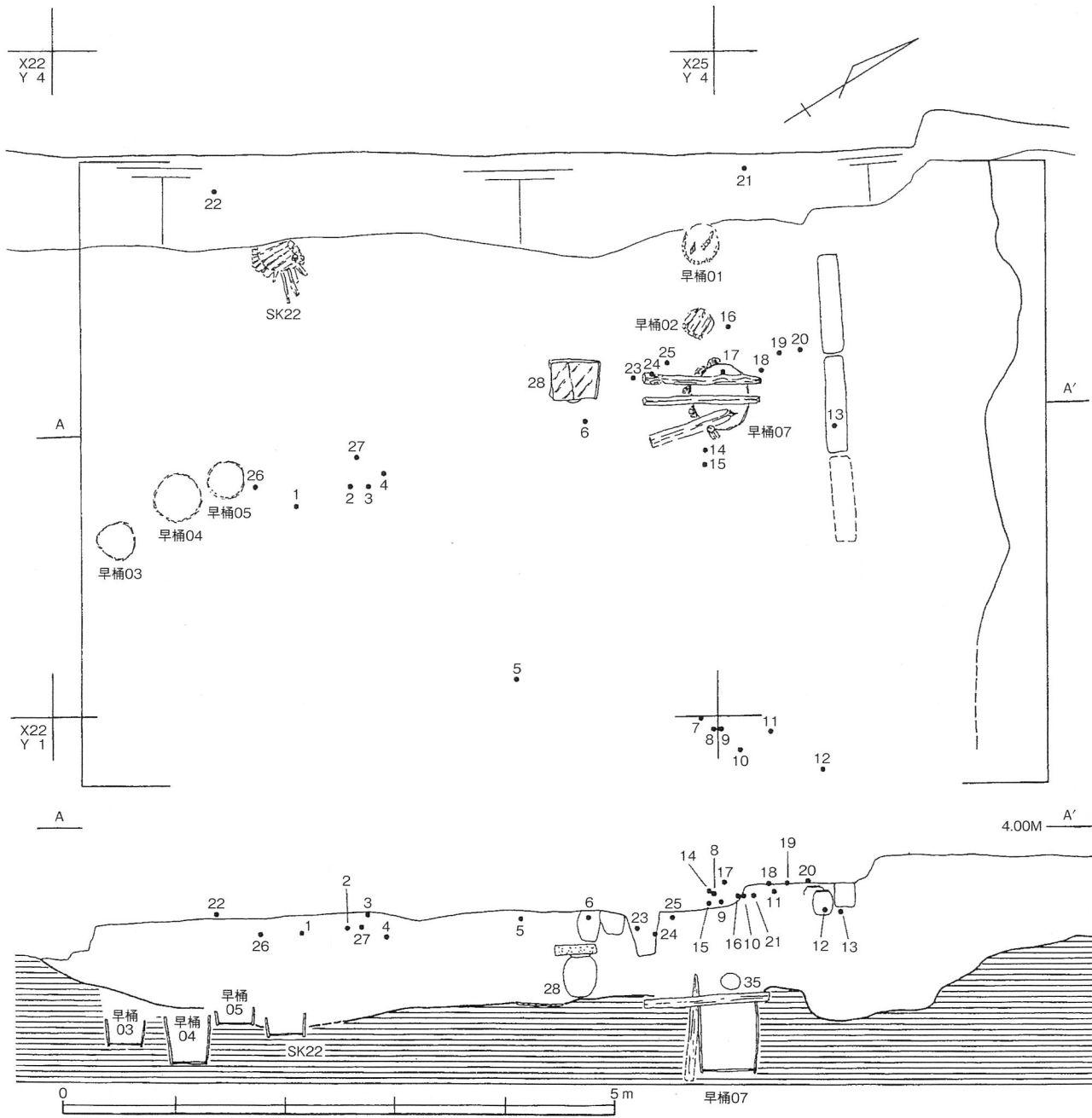
第10図 SK05・06・09・10・12~18・21・38・39・48遺構図 (1/40)



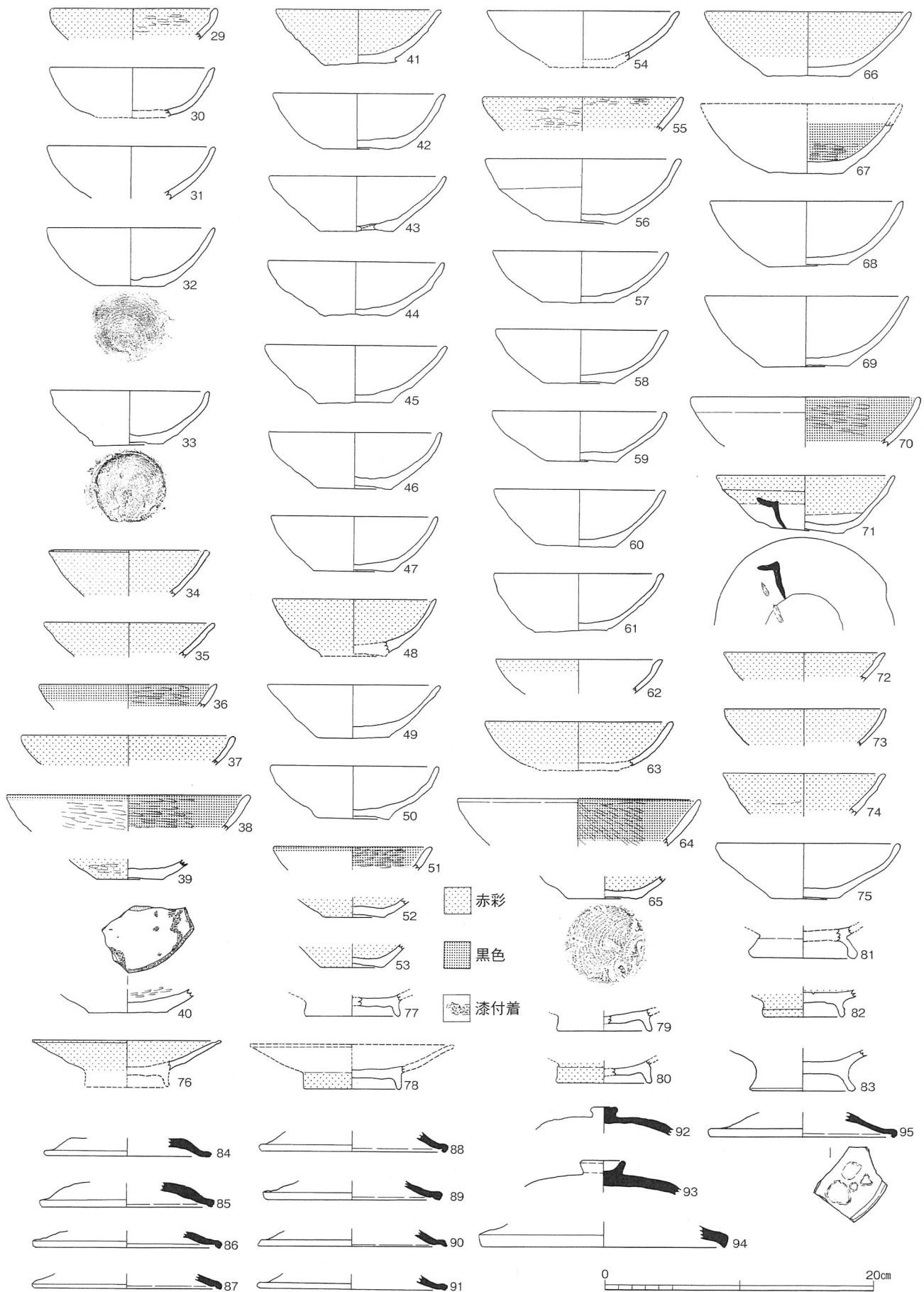
第11図 SK23・31~33・36・37・41・42・44・47・49・55、SD56遺構図 (1/40)



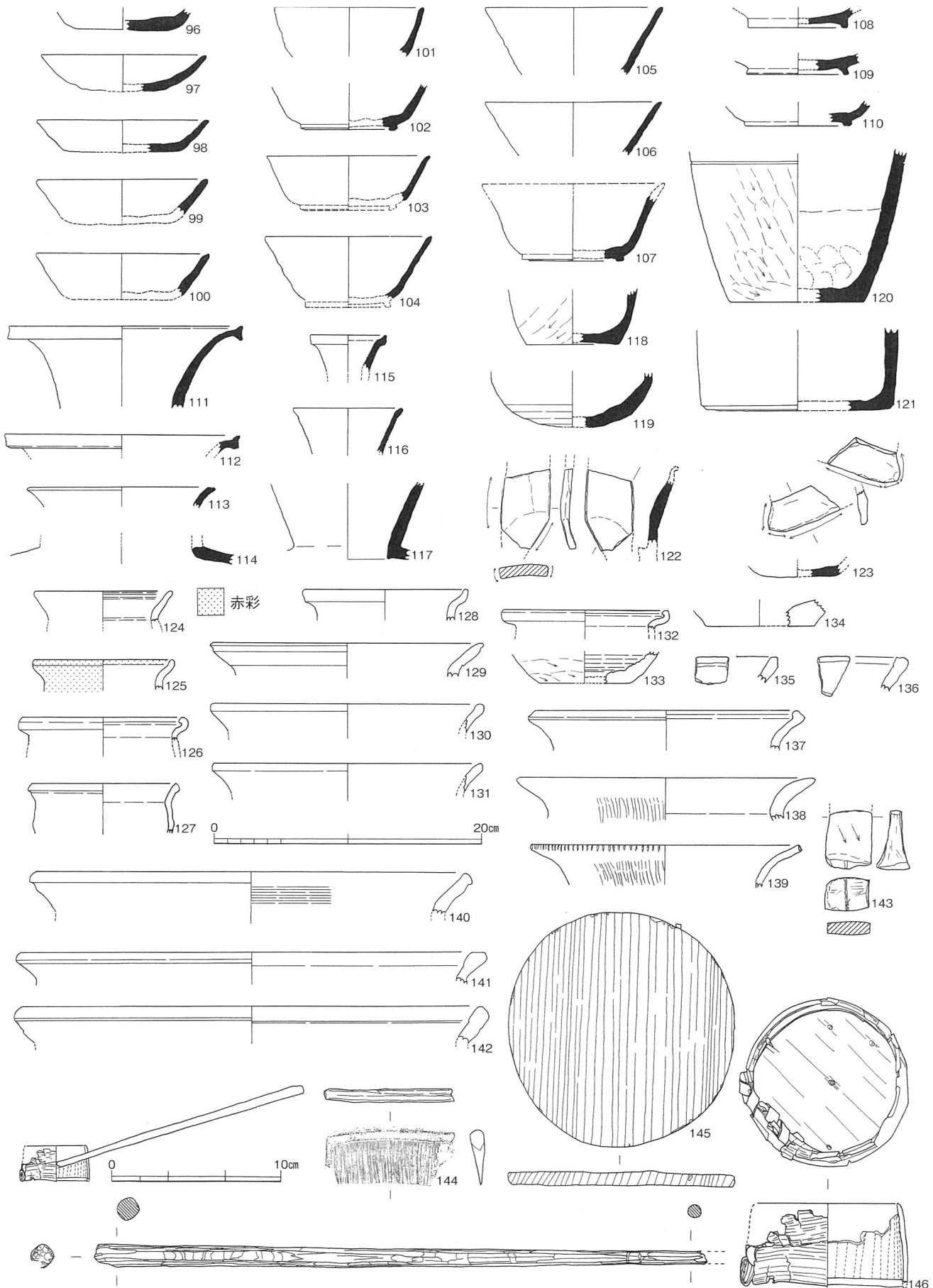
第12図 SK07・22・24・43・45・46・57～59・61、早桶01～05・07遺構図 (1/40)



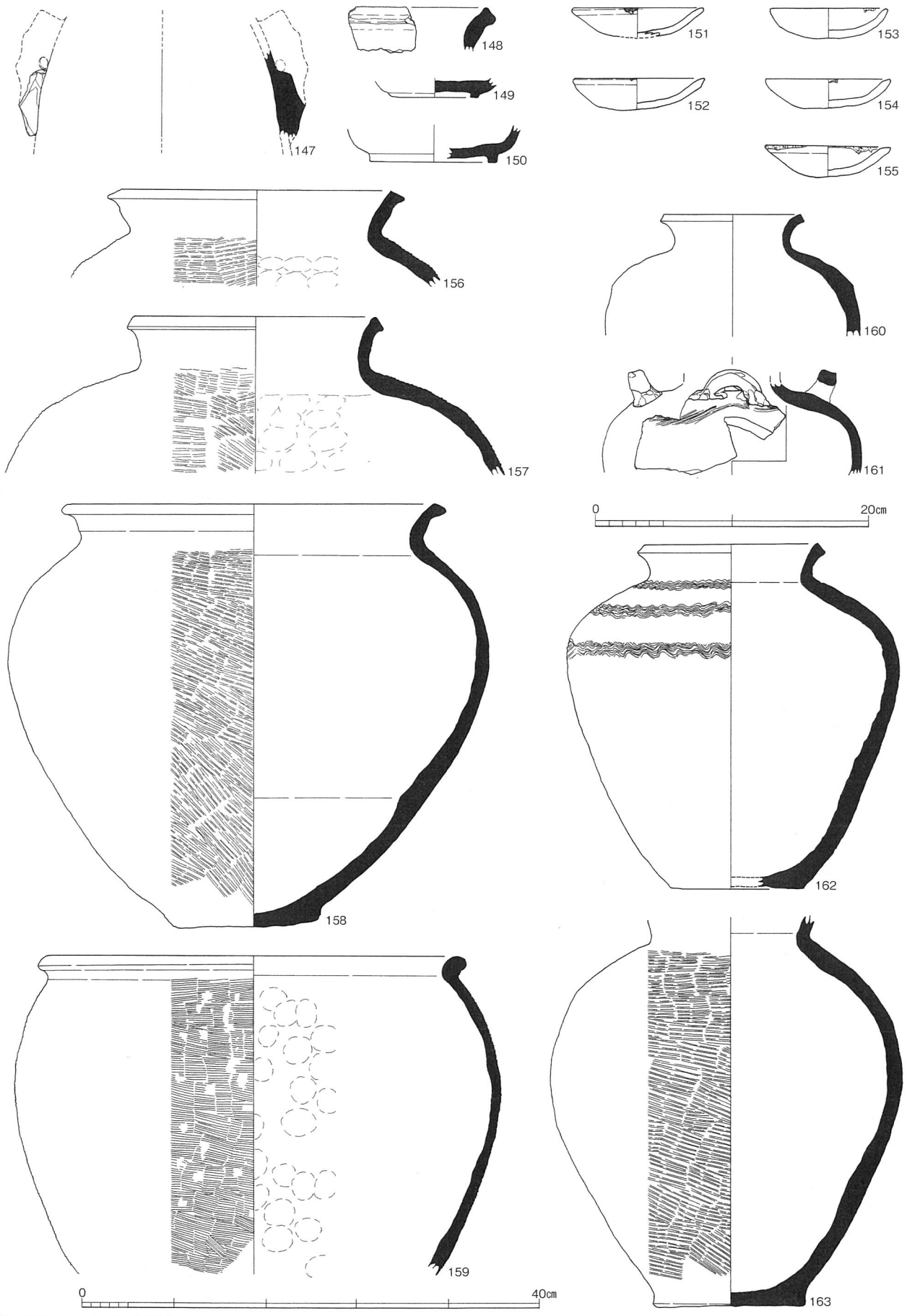
第13図 江戸時代の骨壺の出土位置図 (1/60)



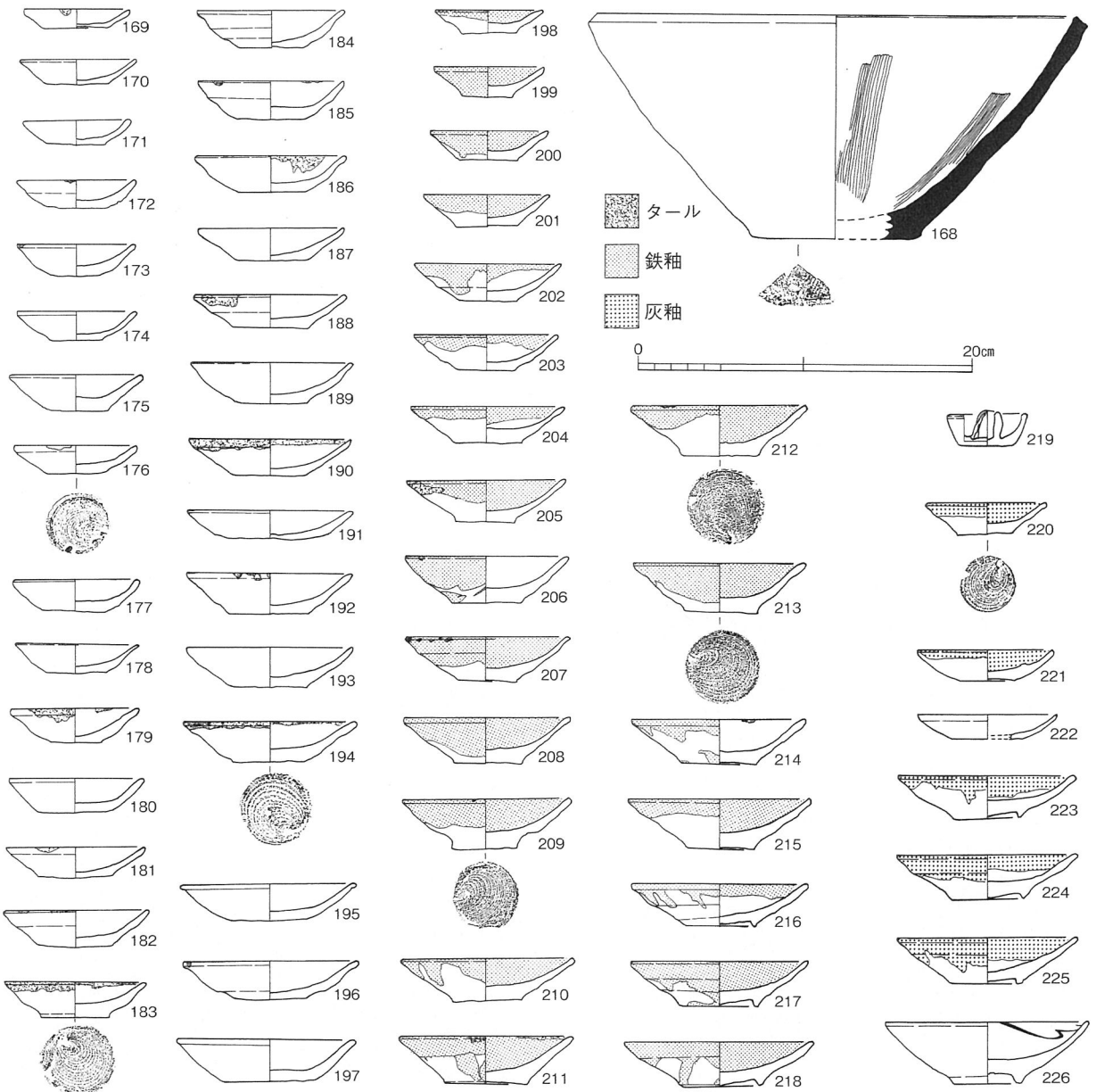
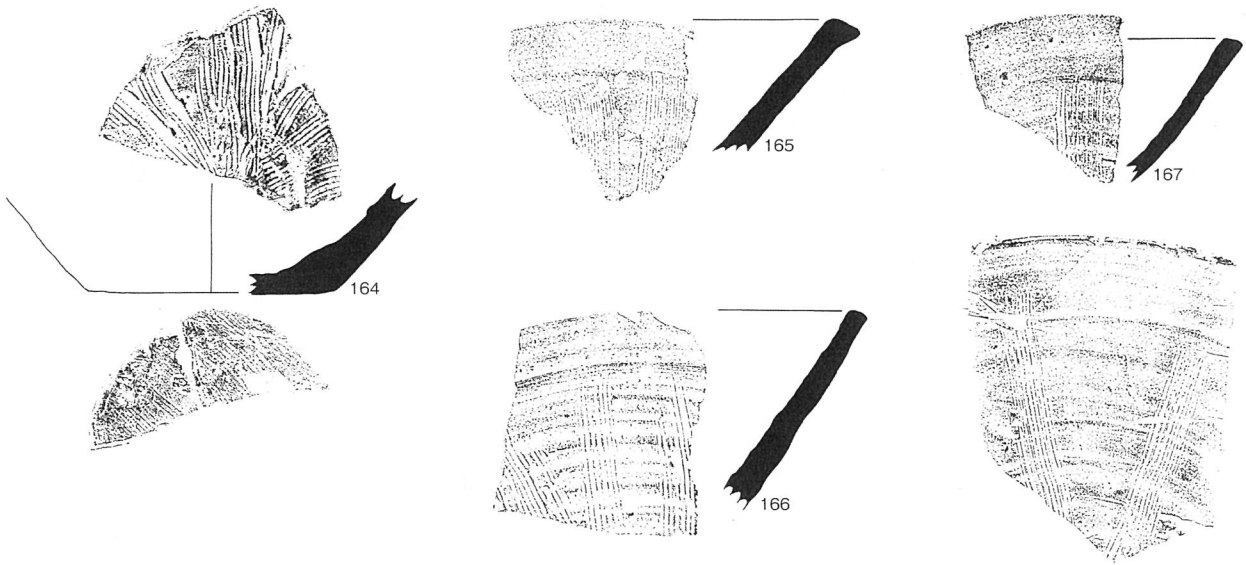
第14図 SE01出土遺物



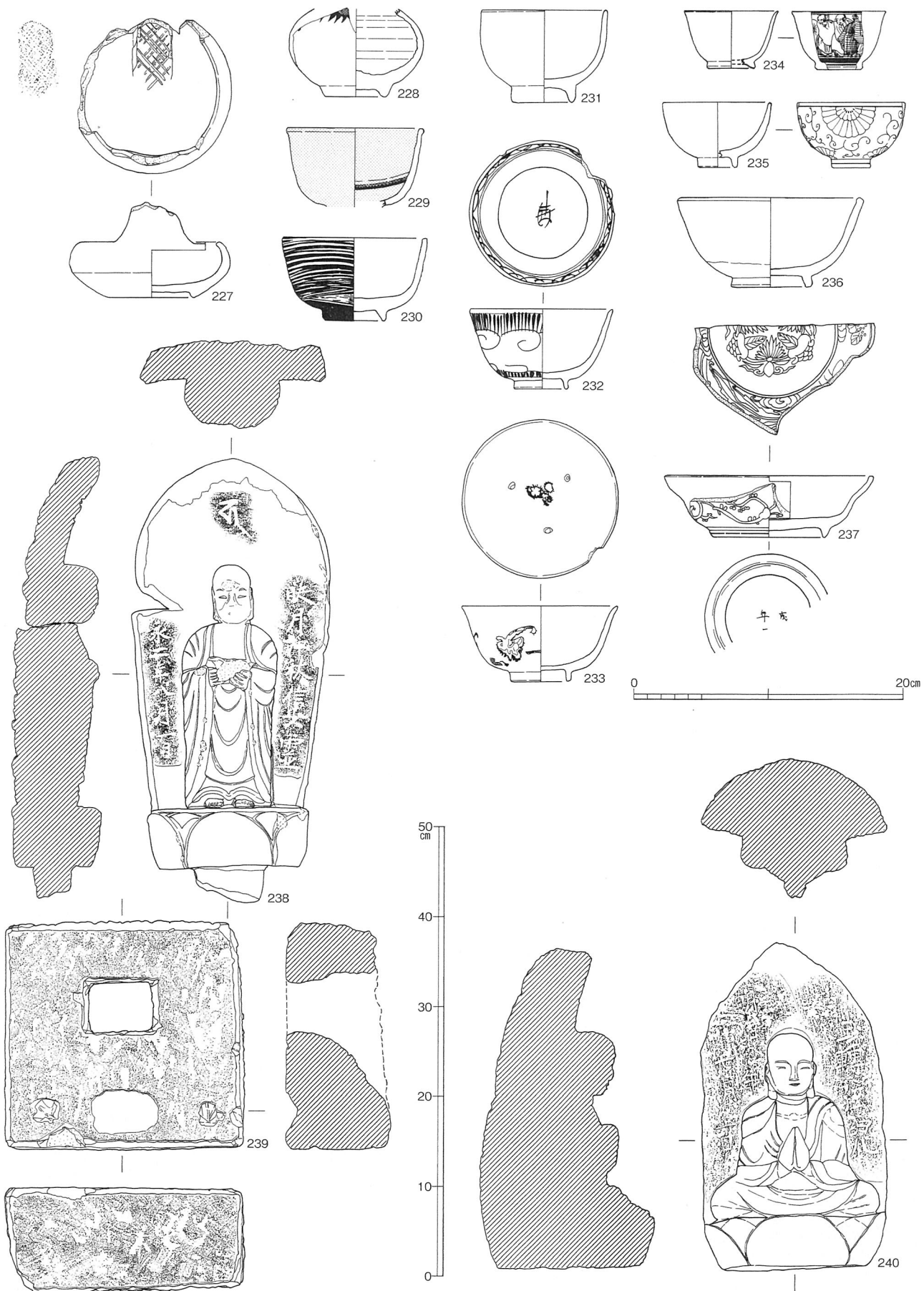
第15图 SE01出土遺物



第16图 SD01出土遺物

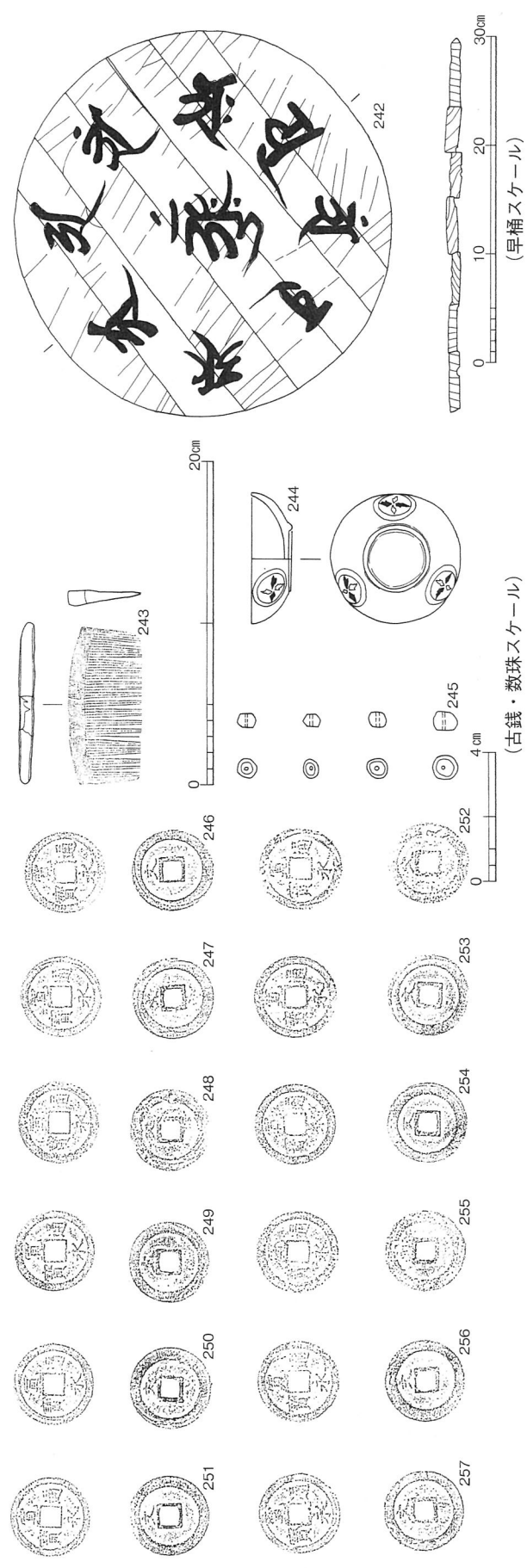
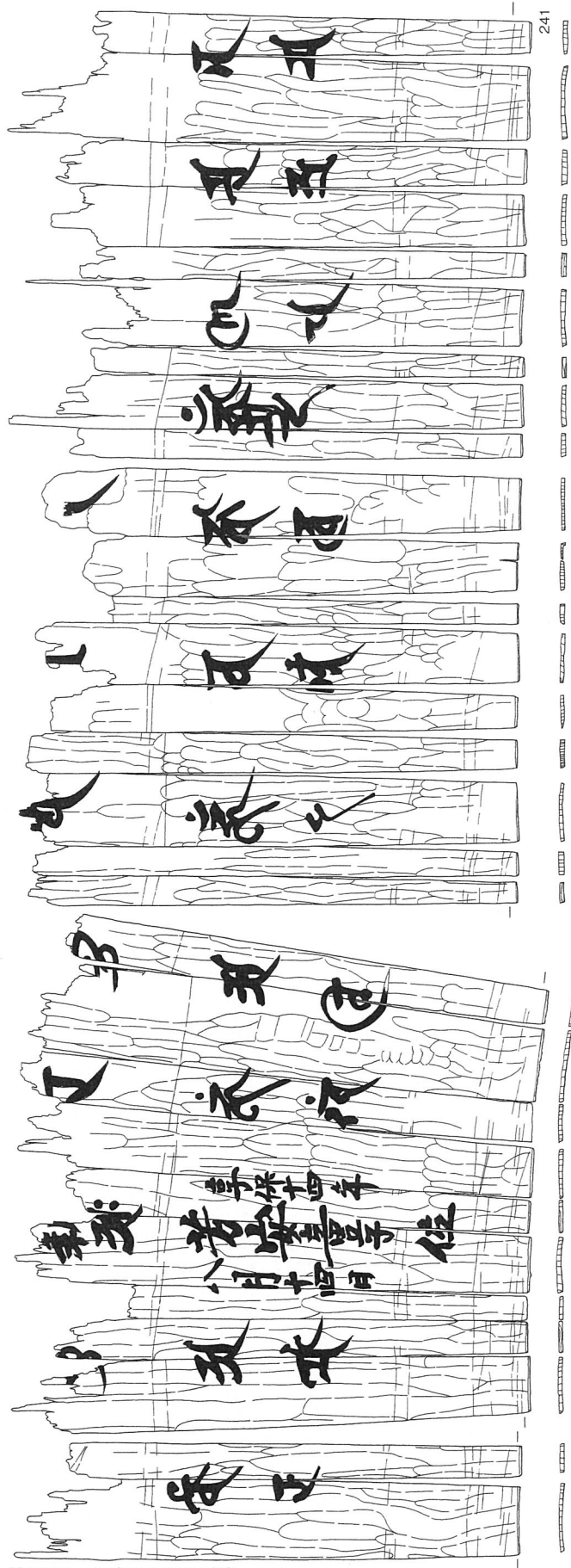


第17図 SD01出土遺物

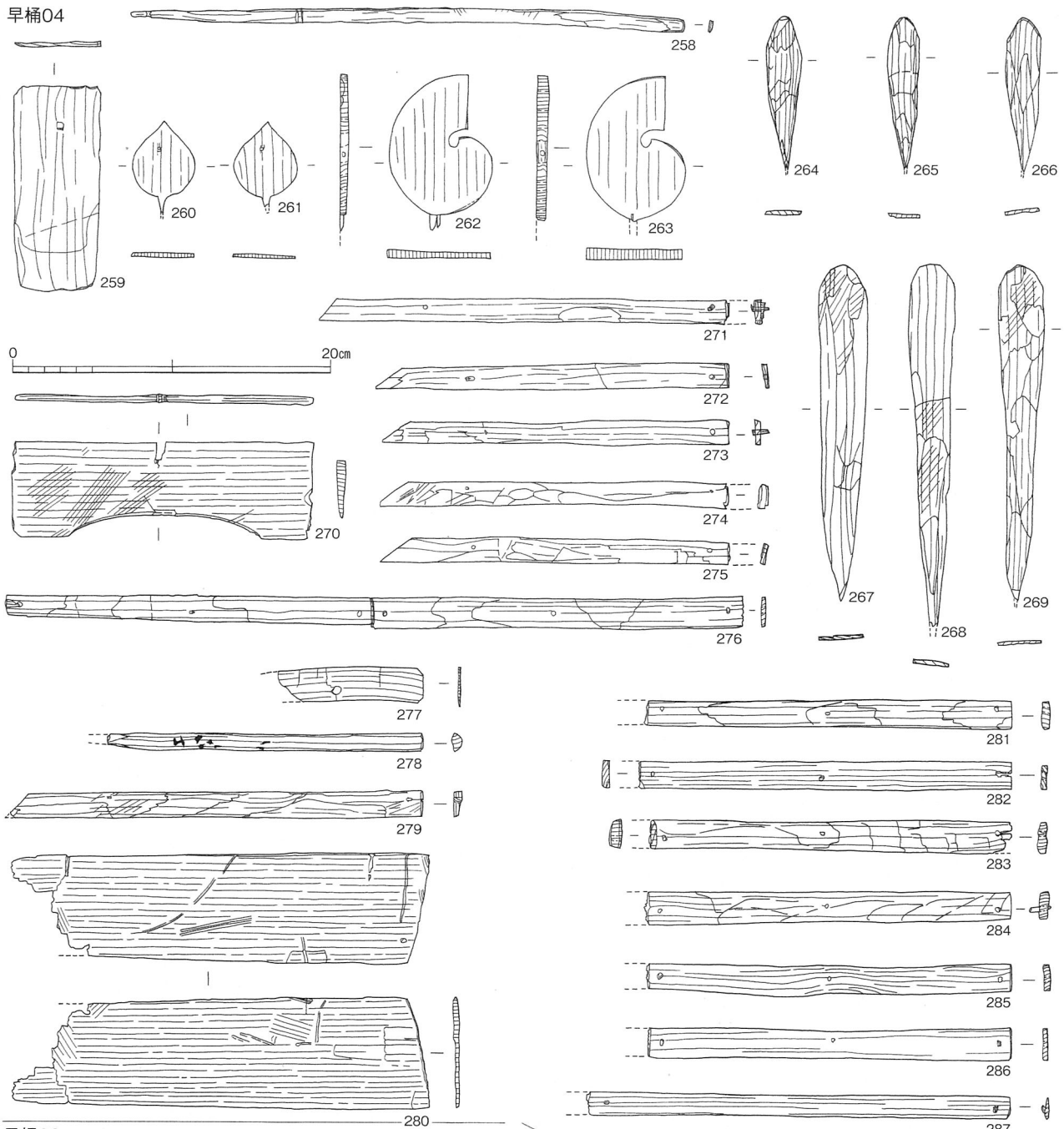


第18图 SD01出土遺物

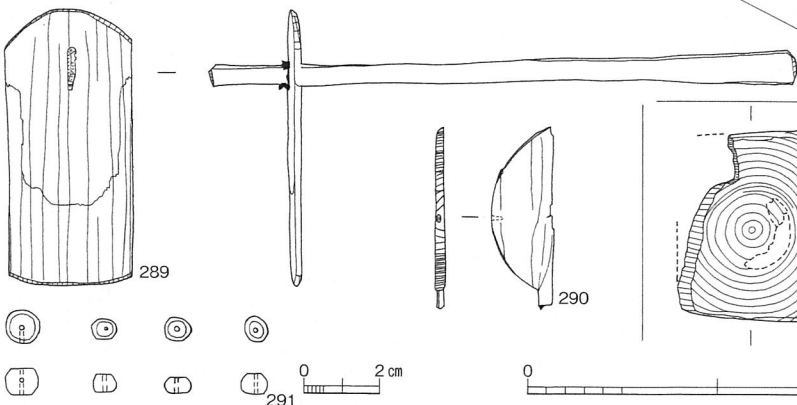
第19図 早桶04出土遺物



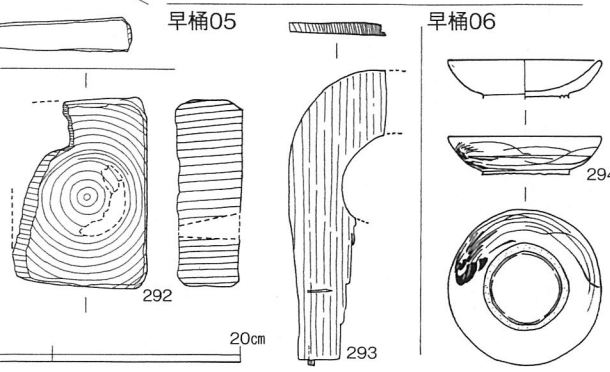
早桶04



早桶03



早桶05

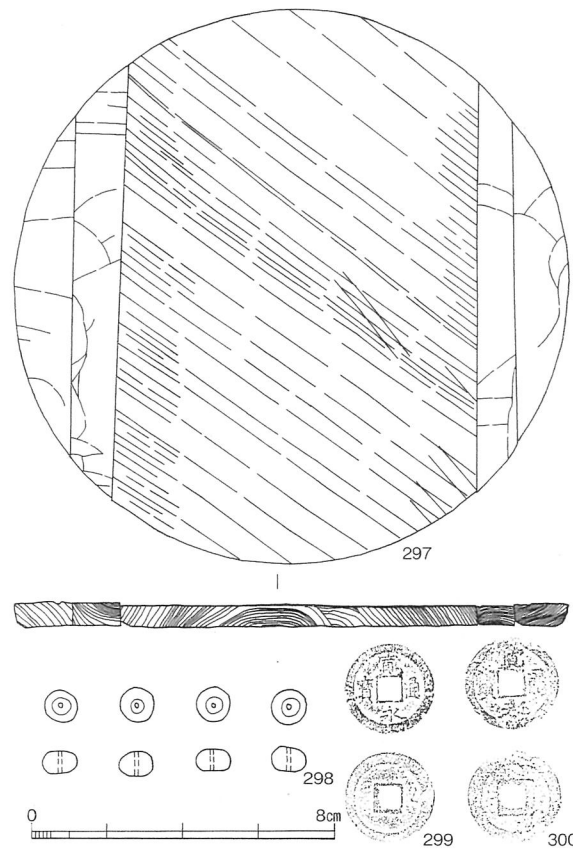
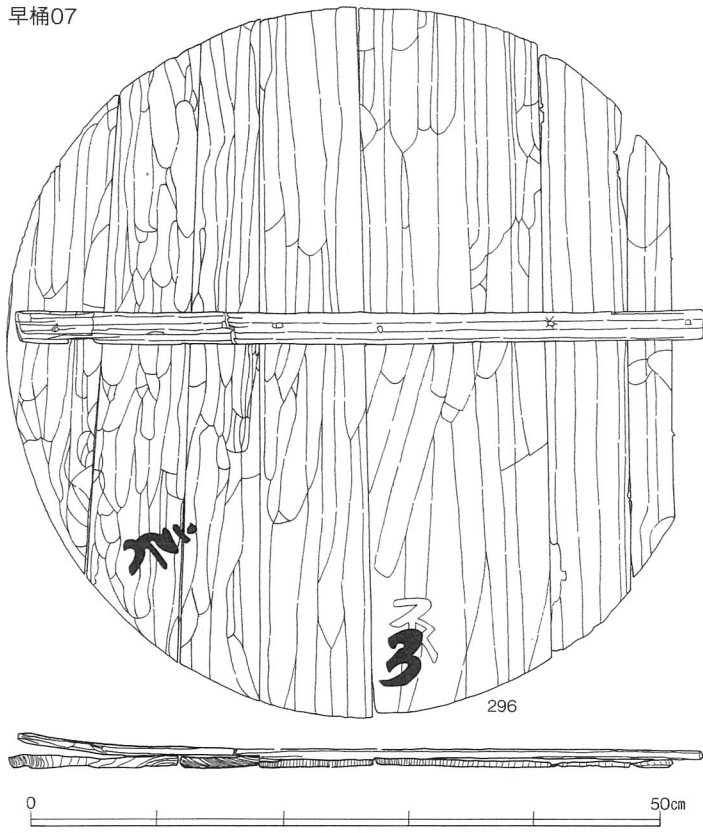


第20图 早桶03·04·05·06出土遗物

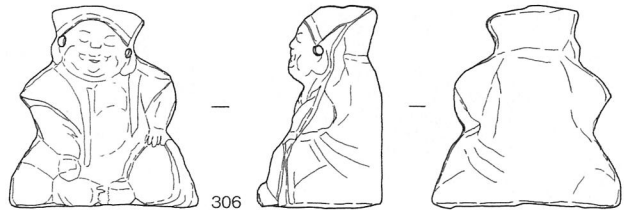
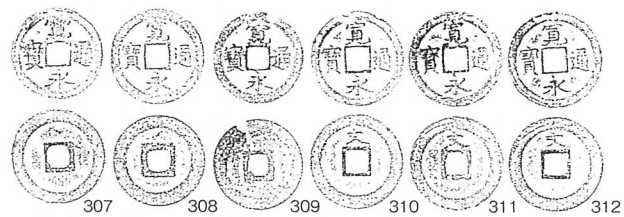
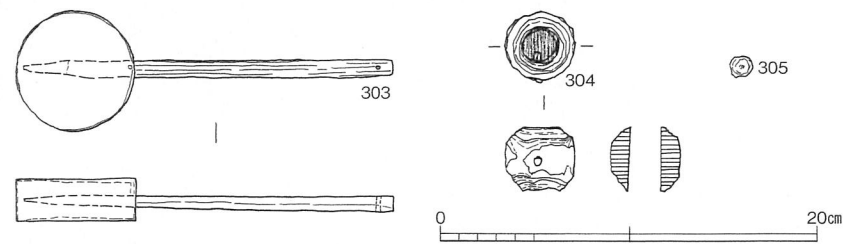
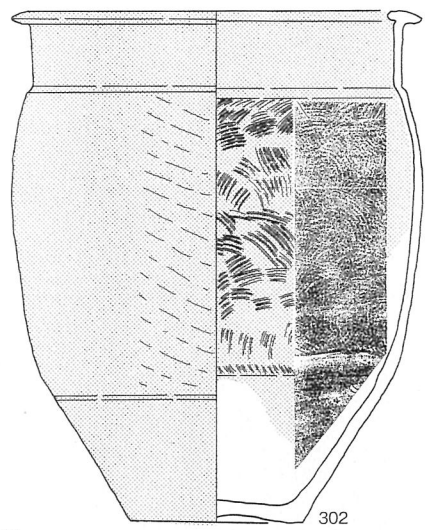
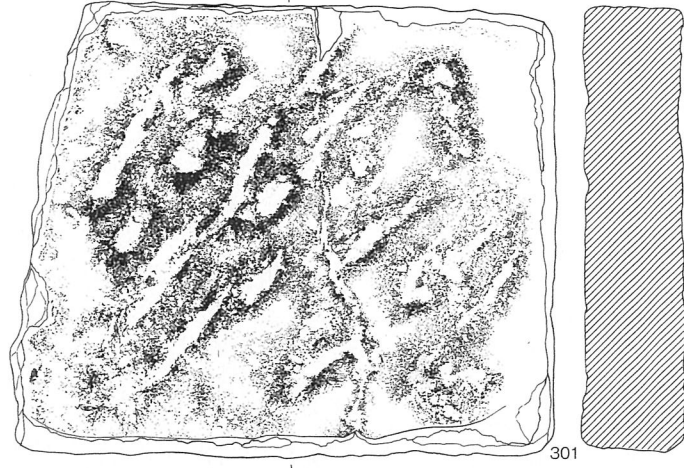


第21图 早桶07出土遺物

早桶07

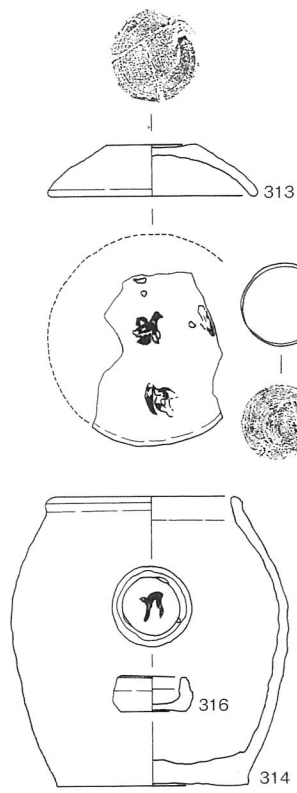


骨壺No.28

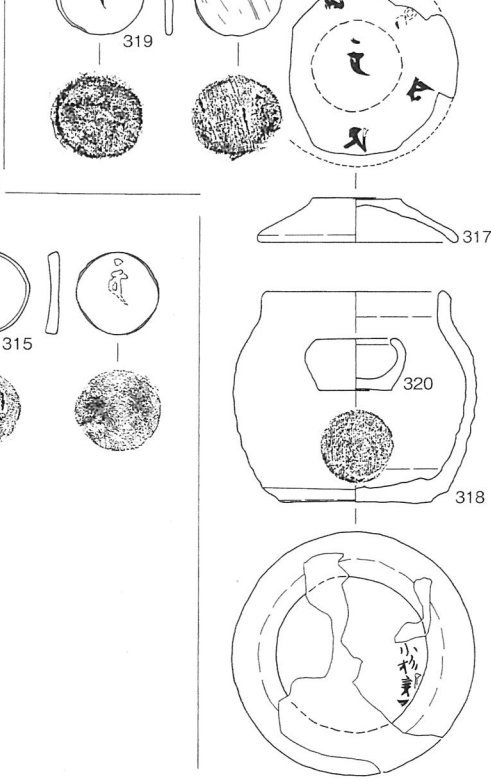


第22図 早桶07、骨壺No.28出土遺物

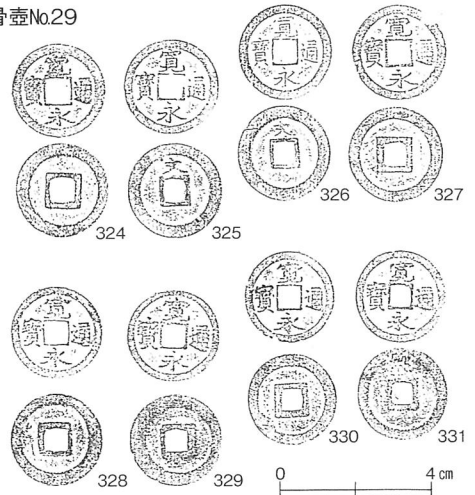
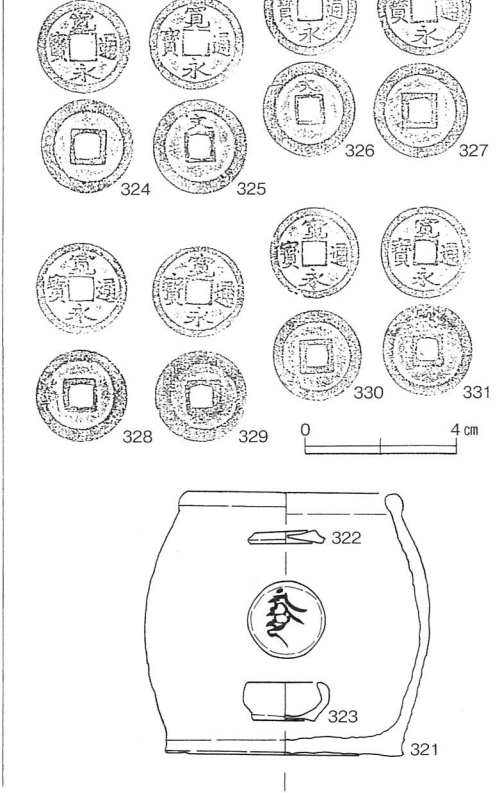
骨壺No.3



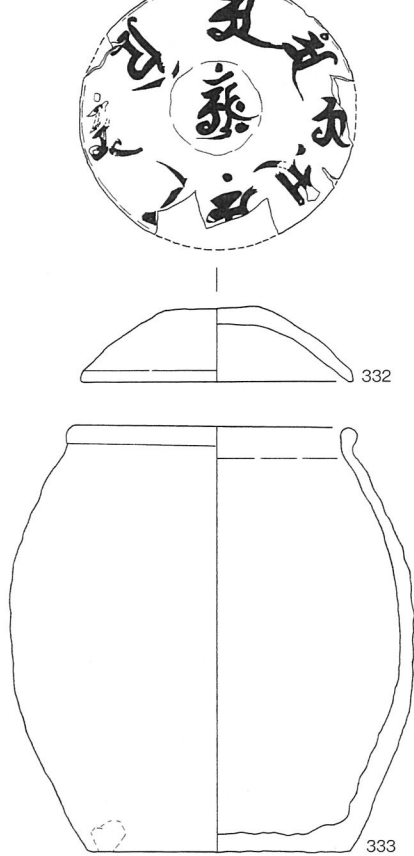
骨壺No.5



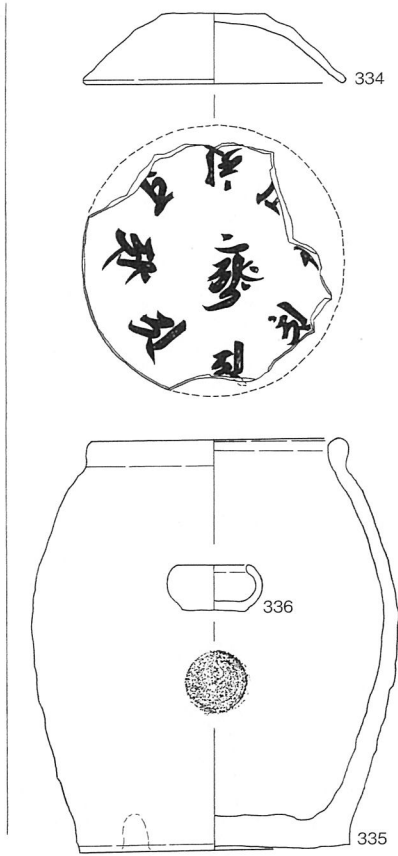
骨壺No.29



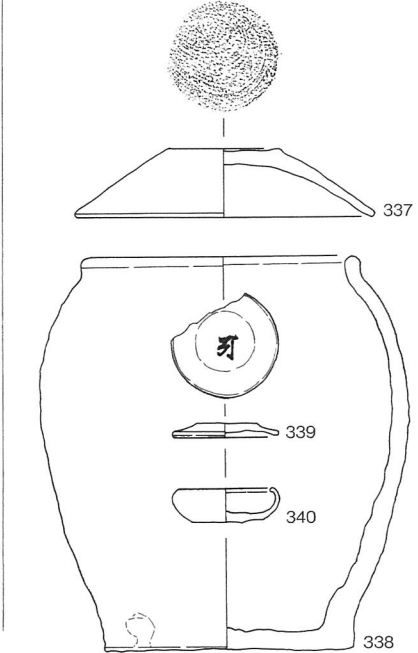
骨壺No.24



骨壺No.26

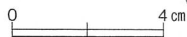
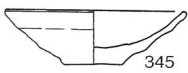
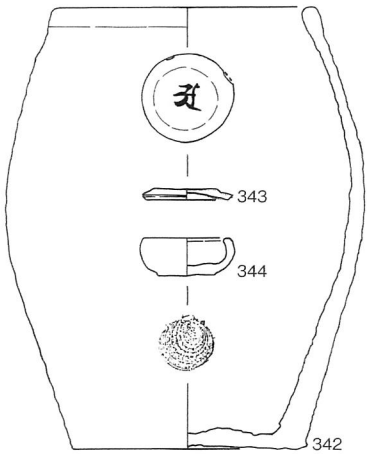
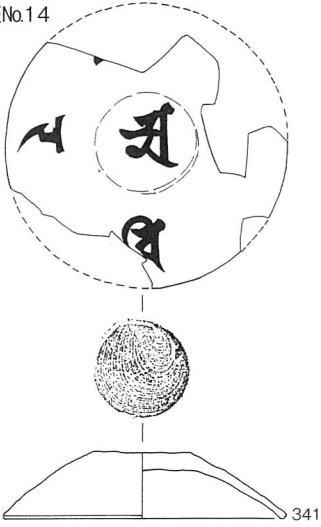


骨壺No.22

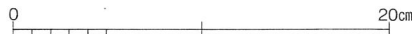
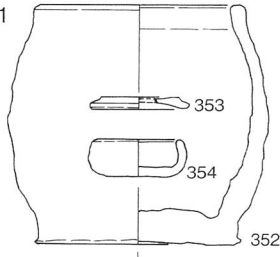


第23図 骨壺No.3・5・22・24・26・29出土遺物

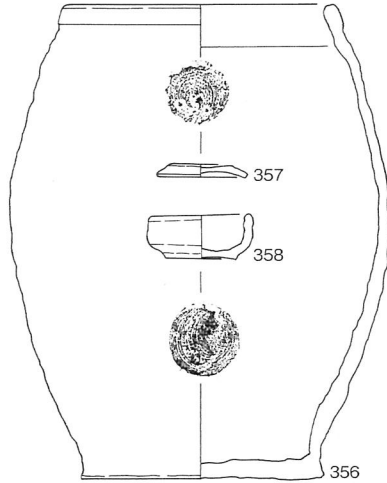
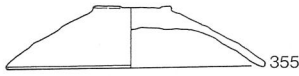
骨壺No.14



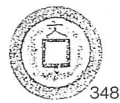
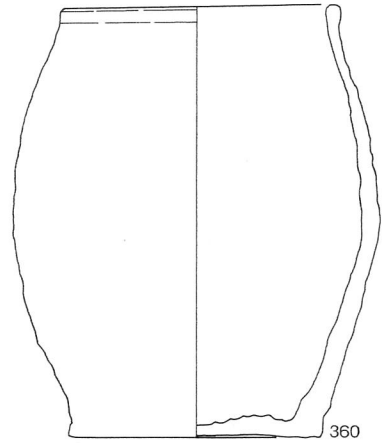
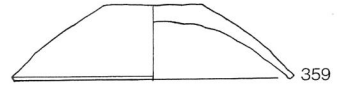
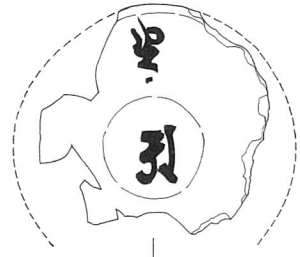
骨壺No.21



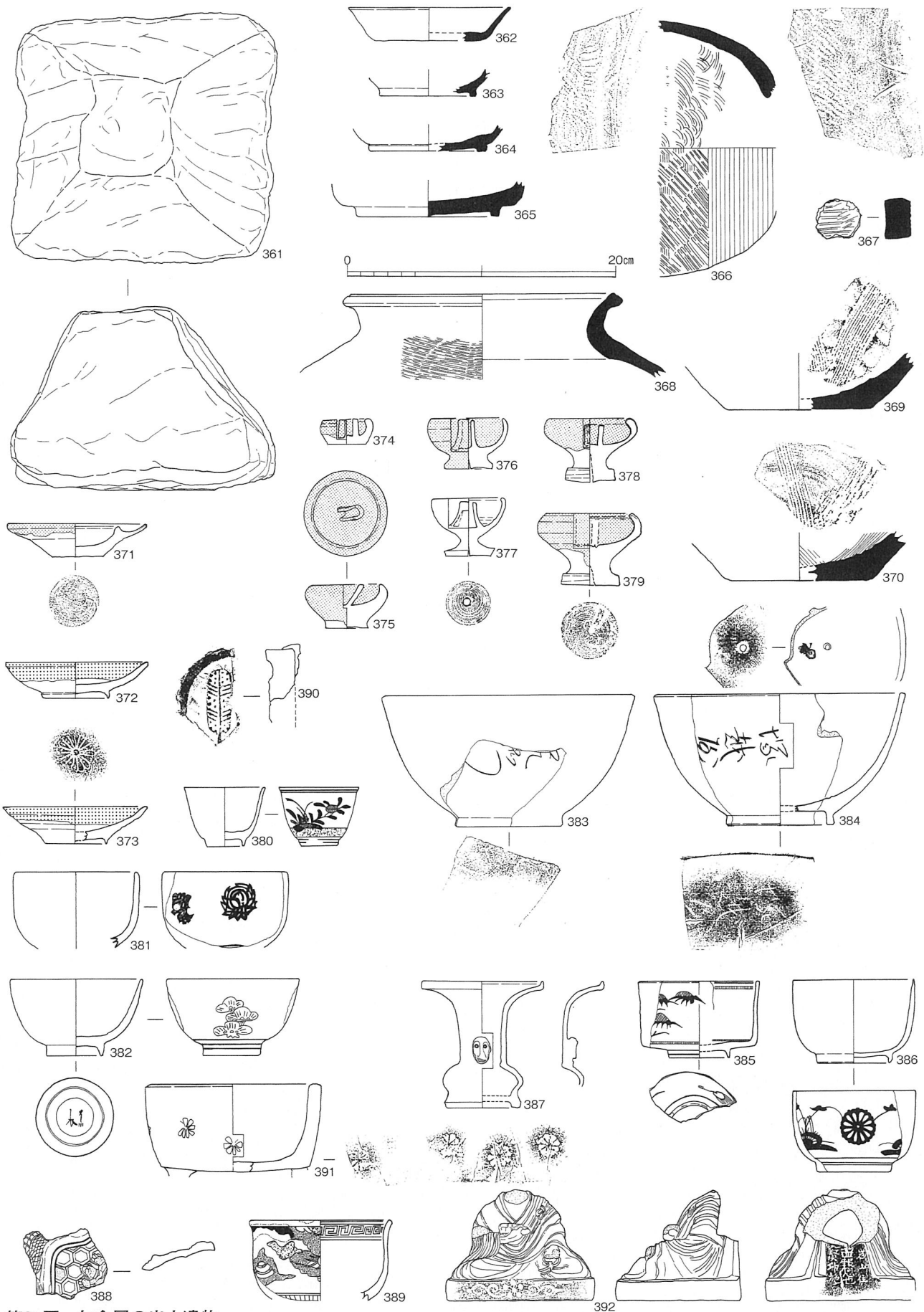
骨壺No.9



骨壺No.18



第24図 骨壺No.9・14・18・21 (古銭スケール)



第25図 包含層の出土遺物

図版	No.	遺構・出土区	種類	器種	口径	器高	底径	備考	残存量
					(長さ)	幅	(厚さ)		
3図	1	2トレンチ	越中瀬戸	皿	10.3	2.6	4.0	鉄釉 重ね焼	完形
	2	2トレンチ	越中瀬戸	ひだ皿	10.1	2.6	3.8	鉄釉 重ね焼	1/2
	3	2トレンチ	越中瀬戸		9.7	2.5	4.3	糸切り 鉄釉 重ね焼	完形
	4	1トレンチ	土師器	甕	19.6			外面煤付着	口～体 1/2
	5	2トレンチ	須恵器	横瓶	(9.8)			指頭圧痕 外面自然釉	口 1/4 体 3/4
	6	1トレンチ	珠洲	甕	31.6				破片
	7	2トレンチ	珠洲	甕			11.3		体下半～底 1/3
	8	2トレンチ・SX01	土師器	皿	10.1	2.5	4.0	糸切り	ほぼ完形
	9	2トレンチ・SX01	土師器	皿	10.3	2.5	4.5	糸切り	ほぼ完形
	10	2トレンチ・SX01	土師器	皿	10.3	2.5	4.2	糸切り	ほぼ完形
	11	2トレンチ・SX01	土師器	皿	9.8	2.4	4.1	糸切り	ほぼ完形
	12	2トレンチ・SX01	土師器	皿	10.4	2.6	4.3	糸切り	ほぼ完形
	13	2トレンチ・SX01		錫杖頭					
	14	2トレンチ・SX01		五鈷杵				緑青付着	
	15	2トレンチ・SX01	木製品					漆	
	16	2トレンチ・SX01			5.0	2.6			1/2
	17	2トレンチ	古銭	渡来銭				「大観通寶」1107年	
	18	2トレンチ	古銭	渡来銭				「紹聖元寶」1094年	
	19	2トレンチ	古銭	渡来銭					
	20	2トレンチ	古銭	渡来銭				「元豊通寶」	
	21	2トレンチ	古銭	渡来銭					
	22	2トレンチ	古銭	渡来銭				「熙寧元寶」1068年	
	23	2トレンチ	古銭	渡来銭					
	24	2トレンチ	古銭	渡来銭				「元符通寶」1098年	
	25	2トレンチ	古銭	渡来銭				「聖宋元寶」1101年	
	26	2トレンチ	古銭	渡来銭				「元豊通寶」1078年	
	27	2トレンチ		伏鈺	9.8	4.1		緑青付着	完形
	28		珠洲	壺	9.9	20.6	8.6	印花文 蓮王寺所蔵	完形
14図	29	SE01 底面	土師器	坏	12.0			内外面赤彩	1/8
	30	SE01 底面	土師器	坏	12.0	(3.7)			1/3
	31	SE01 下層	土師器	坏	12.3			外面煤付着	1/5
	32	SE01 下層	土師器	坏	12.5	4.4	5.2	糸切り 重ね焼	完形
	33	SE01 下層	土師器	坏	11.9	4.1	5.1	糸切り	完形
	34	SE01 中層	土師器	坏	11.3			内外面赤彩	1/8
	35	SE01 上層	土師器	坏	11.8			内外面赤彩	1/8
	36	SE01 中層	土師器	坏	13.0			内外面黒色	1/10
	37	SE01 中層	土師器	坏	15.8			内外面赤彩	1/9
	38	SE01 中層	土師器	坏	(17.8)			口 外面・内面黒色	破片
	39	SE01 底面	土師器	坏			5.0	外面赤彩	底 ほぼ完存
	40	SE01 底面	土師器	坏			5.8	糸切り 内面漆付着	底 1/3
	41	SE01 底面	土師器	坏	12.1	4.1	5.3	糸切り 内外面赤彩	2/5
	42	SE01 下層・底面	土師器	坏	12.6	4.0	5.1	糸切り	2/3
	43	SE01 底面	土師器	坏	12.9	4.1	5.4	糸切り 外面煤付着 内面煤状炭化物付着 底 焼成前穿孔	1/8
	44	SE01 下層	土師器	坏	13.1	4.0	5.2	糸切り	完形
	45	SE01 下層	土師器	坏	13.0	4.3	5.5	糸切り 底 内面煤付着	完形
	46	SE01 下層	土師器	坏	12.9	4.2	5.4	糸切り	1/2
	47	SE01 下層	土師器	坏	12.4	4.2	5.8	糸切り 内外面煤付着 灯火具に転用	2/3
	48	SE01 中層	土師器	坏	12.0	(4.2)		内外面赤彩	1/5
	49	SE01 中層	土師器	坏	12.7	4.0	5.3	糸切り2面あり(1/3範囲) 内外面煤付着	口 1/3 底 完存
	50	SE01 中層	土師器	坏	12.3	4.0	5.4	糸切り	口 1/3 底 完存
	51	排土	土師器	坏	11.6			口 外面・内面黒色	1/10
	52	SE01 中層	土師器	坏			4.5	糸切り 内外面赤彩	底 完存
	53	SE01 上層	土師器	坏			4.5	糸切り 内外面赤彩	底 完存
	54	SE01 底面	土師器	坏	14.2				口 1/6
	55	SE01 中層	土師器	坏	13.8			内外面赤彩	口 1/8
	56	SE01 底面	土師器	坏	14.6	4.6	5.2	糸切り	5/6
	57	SE01 下層	土師器	坏	12.9	3.8	5.5	糸切り	完形
	58	SE01 下層	土師器	坏	12.6	3.9	5.3	糸切り	口 1/3 底 完存
	59	SE01 下層	土師器	坏	12.7	3.6	5.4	糸切り	口 1/3 底 完存
	60	SE01 中層・下層	土師器	坏	12.9	4.3	5.6	糸切り	3/4
	61	SE01 中層	土師器	坏	12.5	4.2	5.4	糸切り2面あり(1/3範囲)	1/3
	62	SE01 中層	土師器	坏	12.3			外面赤彩	1/6
	63	SE01 中層	土師器	坏	13.8	(3.6)		内外面赤彩	口 1/7
	64	SE01 中層	土師器	坏	17.8			内面黒色	口 1/12
	65	SE01 底面	土師器	坏			5.5	糸切り	底 完存
	66	SE01 底面	土師器	坏	15.3	4.8	6.0	糸切り 内外面赤彩・煤付着	1/12 底 2/3
	67	SE01 底面	土師器	坏			5.6	糸切り 内面黒色	底 完存
	68	SE01 下層	土師器	坏	14.2	4.7	5.8	糸切り	2/3
	69	SE01 下層	土師器	坏	15.1	5.3	5.9	糸切り	2/3

第1表 出土遺物観察表

※法量の単位はcm 口：口縁部 底：底部 体：体部

図版	No	遺構・出土区	種類	器種	口径 (長さ)	器高 幅	底径 厚さ)	備考	残存量	
14図	70	SE01 下層	土師器	坏	16.8			内面黒色	口 1/7	
	71	SE01 下層	土師器	坏	13.2	4.1	5.3	内外面赤彩 ヘラ跡 墨書	完形	
	72	SE01 掘り方隅柱	土師器	坏	11.8			内外面赤彩	口 1/10	
	73	SE01 上層	土師器	坏	11.8			内外面赤彩	口 1/7	
	74	SE01 掘り方隅柱	土師器	坏	12.0			内外面赤彩	口 1/5	
	75	SE01 上層	土師器	坏	13.4	4.0	5.0	糸切り	口 1/3 底 完存	
	76	SE01 掘り方隅柱	土師器	坏	14.0			内外面赤彩	口 1/12	
	77	SE01 中層	土師器	坏			7.0	外面赤彩	底 1/5	
	78	SE01 下層	土師器	坏			7.3	糸切り 外面赤彩	底 1/2	
	79	SE01 下層	土師器	坏			7.1	糸切り	底 1/8	
	80	SE01 上層	土師器	坏			7.0	糸切り 内外面赤彩	底 1/5	
	81	SE01 底面	土師器	坏			7.7		破片	
	82	SE01 上層	土師器	坏			6.0	糸切り 内外面赤彩	底 ほぼ完存	
	83	SE01 上層	土師器	坏			7.6	糸切り	底 1/2	
	84	SE01 下層	須恵器	坏蓋	12.2			外面自然釉	口 1/8	
	85	SE01 中層	須恵器	坏蓋	12.7			外面自然釉	口 1/8	
	86	SE01 中層	須恵器	坏蓋	13.4				破片	
	87	SE01 中層	須恵器	坏蓋	13.8				破片	
	88	SE01 掘り方隅柱	須恵器	坏蓋	13.4			内面自然釉	破片	
	89	SE01 中層	須恵器	坏蓋	13.0			内面自然釉	口 1/12	
	90	SE01 中層	須恵器	坏蓋	13.0			内面自然釉	破片	
	91	SE01 中層	須恵器	坏蓋	13.0			内面自然釉	破片	
	92	SE01 掘り方隅柱	須恵器	坏蓋					破片	
	93	SE01 中層	須恵器	坏蓋					破片	
	94	SE01	須恵器	坏蓋	18.0				破片	
	95	SE01 掘り方隅柱	須恵器	坏蓋 硯	13.4			外面自然釉 内面墨痕 坏蓋を利用した硯	口 1/8	
	15図	96	SE01 上層	須恵器	坏					底 1/4
		97	SE01 中層	須恵器	坏	12.0			外面自然釉 重ね焼	口 1/4
		98	SE01 掘り方	須恵器	坏	12.4				口 1/8
		99	SE01 中層	須恵器	坏	12.6				口 1/12
100		SE01 上層	須恵器	坏	12.6				口 1/12	
101		SE01 掘り方隅柱	須恵器	坏	11.0				口 1/5	
102		SE01 底面	須恵器	坏			6.8		底 1/4	
103		SE01 下層	須恵器	坏	12.0				口 1/8	
104		SE01 下層	須恵器	坏	12.2				口 1/12	
105		SE01 中層	須恵器	坏	13.0				口 1/8	
106		SE01 中層	須恵器	坏	13.0				口 1/8	
107		SE01 底面	須恵器	坏			7.7		底 1/8	
108		SE01 上層	須恵器	坏			6.6		底 1/4	
109		SE01 下層	須恵器	坏			7.6		底 1/3	
110		SE01 中層	須恵器	坏			7.8		底 1/5	
111		SE01 底面	須恵器	広口壺	17.1			内外面自然釉	口 ほぼ完存	
112		SE01 底面	須恵器	広口壺	17.0				口 1/5	
113		SE01 底面	須恵器		13.8				口 1/12	
114		SE01 中層	須恵器	壺				外面自然釉	破片	
115		SE01 中層	須恵器		5.6				口 1/4	
116		SE01 中層	須恵器	長頸壺	8.2			1mm径の砂粒多く含む	口 1/4	
117		SE01 中層	須恵器	広口壺					破片	
118		SE01 中層	須恵器				6.8	底 外面ヘラ削り	底 1/3	
119		SE01 中層	須恵器					底 外面ロクロ削り	底 1/4	
120		SE01 中層	須恵器				10.0	底 外面ヘラ削り	底 1/3	
121		SE01 中層	須恵器				13.8		底 1/4	
122		SE01 上層	須恵器					焼成後坏蓋片の側面を磨く		
123		SE01 底面	須恵器					坏A底面片の側面2箇所を磨く		
124		SE01 下層	土師器	甕	10.0			内面煤付着	口 1/8	
125		SE01 下層	土師器	甕	10.4			内外面赤彩	破片	
126	SE01 底面	土師器	甕	12.0				口 1/12		
127	SE01 上層	土師器	甕	10.8				破片		
128	SE01 掘り方隅柱	土師器	甕	12.2			内外面煤付着	口 1/12		
129	SE01 下層	土師器	甕	20.0			内面煤付着	破片		
130	SE01 中層	土師器	甕	20.0				破片		
131	SE01 下層	土師器	甕	19.8				破片		
132	SE01 下層	土師器	甕	12.2				口 1/12		
133	SE01	土師器	甕			5.0		底 1/5		
134	SE01 下層	土師器	甕			8.0	緑釉?	破片		
135	SE01 下層	土師器	甕				外面煤付着	破片		
136	SE01 下層	土師器	鍋					破片		
137	SE01 上層	土師器	甕	19.6				破片		
138	SE01 下層	土師器	甕	22.0				破片		
139	SE01 掘り方隅柱	土師器	甕	20.0				口 1/12		
140	SE01 付近	土師器	鍋	32.0			外面煤付着	破片		

※法量の単位はcm 口：口縁部 底：底部

図版	No.	遺構・出土区	種類	器種	口径	器高	底径	備考	残存量
					(長さ)	幅	(厚さ)		
15図	141	SE01 中層	土師器	鍋	32.6				破片
	142	SE01 中層	土師器	鍋	32.0				破片
	143	SE01 掘り方隅柱	石製品	砥石		3.5		粘板岩	
	144	SE01 下層	木製品	横櫛					
	145	SE01 下層	木製品	底板	18.4	17.0	1.2	木釘	
	146	SE01 下層	木製品	柄杓	12.4	12.6	6.3	柄の長さ(51.8cm)	
16図	147	X29Y3	須恵器	双耳瓶				胴上部 1穴の耳	破片
	148	X37Y2	須恵器	甕					破片
	149	X19Y4	須恵器	坏			6.2		底 完存
	150	X35Y2	須恵器	坏			9.1		底 1/4
	151	X31Y3	中世土師器	灯明皿	9.6			外面タール附着	3/4
	152	X28Y3	中世土師器	灯明皿	9.5	2.4		外面タール附着	1/2
	153	X29Y3	中世土師器	灯明皿	8.5	2.3		内面タール附着	完形
	154	X29Y2	中世土師器	灯明皿	9.1	2.2		内面タール附着	2/3
	155	X29Y3	中世土師器	灯明皿	9.1	2.2		内外面タール附着	ほぼ完形
	156	X34Y2	珠洲	甕	19.7				口 1/4
	157	X36Y2	珠洲	甕	17.6				口 1/12
	158	X34Y2	珠洲	甕	26.4	30.9	10.6		1/2
	159	X26Y2	珠洲	甕	44.5			内外面自然釉	口~体 1/6
	160	X27Y3	珠洲	甕	10.0				口 1/4
161	X32Y2	珠洲	壺				櫛描波状文 上位(4方) 把手	破片	
162	X36Y2	珠洲	甕	12.3	25.2	9.6	3条波状文	2/3	
163	X27Y2	珠洲	甕			11.1	外面自然釉	体~底 3/4	
17図	164	X34Y2	珠洲	片口鉢			13.3		底 1/2
	165	X34Y2	珠洲	片口鉢					破片
	166	X32Y2	珠洲	片口鉢					破片
	167	X30Y2	珠洲	片口鉢					破片
	168	X33Y2	珠洲	片口鉢	28.8	13.4	10.0		口 1/3 底 1/10
	169	X36Y2	かわらけ	灯明皿	6.3	1.1	3.8	糸切り 外面タール附着	ほぼ完形
	170	X29Y2	かわらけ	皿	6.1	1.6	3.8	糸切り	ほぼ完形
	171	X37Y2	かわらけ	皿	6.2	1.5	3.6	糸切り	完形
	172	X33Y2	かわらけ	灯明皿	6.9	1.7	3.6	糸切り 外面タール附着	完形
	173	X33Y2	かわらけ	灯明皿	6.7	1.9	2.9	糸切り 外面タール附着	ほぼ完形
	174	X31Y3	かわらけ	皿	7.1	1.8	3.2	糸切り	口 1/4 底 完存
	175	X31Y2	かわらけ	皿	7.1	2.2	3.9	糸切り	口 3/4 底 完存
	176	X28Y2	かわらけ	灯明皿	7.2	1.7	3.7	糸切り 外面タール附着	完形
	177	X27Y2	かわらけ	皿	7.2	1.9	3.6	糸切り	完形
	178	X34Y2	かわらけ	皿	7.3	1.8	3.7	糸切り	3/4
	179	X28Y2	かわらけ	灯明皿	7.6	2.1	3.1	糸切り 内外面タール附着	完形
	180	X33Y2	かわらけ	皿	8.0	2.1	4.5	糸切り	口 3/4 底 完存
	181	X28Y2	かわらけ	灯明皿	8.3	1.8	4.6	糸切り 外面タール附着	完形
	182	X29Y2	かわらけ	灯明皿	8.5	2.3	4.6	糸切り 外面タール附着	完形
	183	X29Y2	かわらけ	灯明皿	8.3	2.2	4.3	糸切り 内外面タール附着	完形
	184	X33Y1	かわらけ	皿	8.6	2.2	4.1	糸切り	口 1/2 底 完存
	185	X28Y2	かわらけ	灯明皿	8.6	2.3	4.3	糸切り 内外面タール附着	完形
	186	X29Y2	かわらけ	灯明皿	8.6	2.2	4.2	糸切り 内面タール附着	ほぼ完形
	187	X28Y2	かわらけ	灯明皿	8.7	1.8	4.2	糸切り 外面タール附着	完形
	188	X33Y2	かわらけ	灯明皿	9.0	2.0	4.6	糸切り 外面タール附着	完形
	189	X35Y2	かわらけ	皿	9.5	2.5	4.4	糸切り	口 1/3 底 完存
	190	X39Y2・3	かわらけ	灯明皿	9.6	2.2	4.1	糸切り 内外面タール附着	ほぼ完形
	191	X33Y2	かわらけ	灯明皿	9.7	1.7	5.1	糸切り 外面タール附着	ほぼ完形
	192	X28Y2	かわらけ	灯明皿	9.7	2.5	4.8	糸切り 外面タール附着	完形
	193	X29Y2	かわらけ	灯明皿	9.7	2.4	4.7	糸切り 内面タール附着	ほぼ完形
	194	X26Y2・3	かわらけ	灯明皿	10.1	2.4	4.2	糸切り 内外面タール附着	口 1/4 底 完存
	195	X34Y2	かわらけ	皿	10.2	2.2	4.6	糸切り	口 1/3 底 完存
	196	X26Y2	かわらけ	灯明皿	10.4	2.3	4.5	糸切り 内外面タール附着	1/2
	197	X27Y2	かわらけ	灯明皿	10.5	2.6	5.6	糸切り 内面タール附着	口 1/2 底 完存
198	X36Y2・3	越中瀬戸	皿	6.3	1.4	3.2	糸切り 鉄釉	完形	
199	X35Y1	越中瀬戸	皿	6.4	1.8	3.0	糸切り 鉄釉	口 4/5 底 完存	
200	X28Y2	越中瀬戸	皿	7.0	1.8	3.5	糸切り 鉄釉	完形	
201	X33Y1	越中瀬戸	灯明皿	7.4	1.9	3.6	糸切り 鉄釉 外面タール附着 重ね焼	完形	
202	X28Y2	越中瀬戸	皿	8.4	2.2	3.6	糸切り 鉄釉	完形	
203	X27Y3	越中瀬戸	皿	8.6	2.2	3.5	糸切り 鉄釉	完形	
204	X26Y2	越中瀬戸	皿	9.2	2.2	4.1	糸切り 鉄釉	完形	
205	X27Y2	越中瀬戸	灯明皿	9.5	2.5	3.5	糸切り 鉄釉 外面タール附着	完形	
206	X37Y2	越中瀬戸	灯明皿	9.6	2.8	4.1	糸切り 鉄釉 外面タール附着	完形	
207	X38Y2	越中瀬戸	灯明皿	9.7	2.7	3.6	糸切り 鉄釉 外面タール附着 重ね焼	完形	
208	X27Y2	越中瀬戸	皿	9.8	2.8	4.1	糸切り 鉄釉 重ね焼	口 2/3 底 完存	
209	X32Y2	越中瀬戸	灯明皿	10.0	2.7	3.9	糸切り 鉄釉 外面タール附着	ほぼ完形	
210	X26Y2・3	越中瀬戸	皿	10.0	2.5	4.1	糸切り 鉄釉 重ね焼	口 1/3 底 完存	
211	X33Y2	越中瀬戸	灯明皿	10.1	2.9	4.9	糸切り 鉄釉 内外面タール附着 重ね焼	完形	

※法量の単位はcm 口：口縁部 底：底部 体：体部

図版	No	遺構・出土区	種類	器種	口径	器高	底径	備考	残存量
					(長さ)	幅	(厚さ)		
17図	212	X26Y1	越中瀬戸	灯明皿	10.3	3.0	4.7	糸切り鉄釉 外面タール付着 重ね焼	完形
	213	X36Y2	越中瀬戸	灯明皿	10.2	3.0	4.5	糸切り鉄釉 外面タール付着 重ね焼	完形
	214	X33Y2	越中瀬戸	灯明皿	10.4	2.7	4.6	糸切り鉄釉 内外面タール付着 重ね焼	完形
	215	X26Y2・3	越中瀬戸	皿	10.7	3.0	4.0	糸切り鉄釉 重ね焼	口 2/3 底 完存
	216	X31Y3	越中瀬戸	皿	10.5	2.5	4.2	鉄釉	完形
	217	X28Y2	越中瀬戸	皿	10.5	2.7	4.5	鉄釉	口 1/2 底 完存
	218	X27Y3	越中瀬戸	皿	11.1	2.7	4.6	鉄釉	口 2/3 底 完存
	219	X36Y2	土師器	灯明具	4.2	2.1	3.1	内面タール付着	完形
	220	X35Y2	越中瀬戸	灯明皿	7.0	1.9	3.3	糸切り鉄釉 内面タール付着 重ね焼	口 1/2 底 完存
	221	X31Y2	信楽	皿	8.0	1.9	3.3	灰釉 重ね焼 19世紀	完形
	222	X28Y1		皿	8.4	1.5	4.3	灰釉	1/6
	223	X36Y2・3	越中瀬戸	皿	10.3	2.6	4.2	灰釉	ほぼ完形
	224	X27Y3	越中瀬戸	皿	10.5	2.7	4.3	灰釉 重ね焼	ほぼ完形
	225	X27Y3	越中瀬戸	皿	10.5	2.8	3.8	灰釉	口 2/3 底 完存
226	X36Y2	唐津	皿	12.2	3.8	4.0	17世紀後半	口 4/5 底 完存	
18図	227	X29Y2			10.2		6.2		1/2
	228	X30Y2					4.6		底 完存
	229	X27Y2			10.0			内外面鉄釉	口 1/4
	230	X30Y2			10.5		6.1		口 1/4 底 完存
	231	X28Y2	肥前		9.3	6.8	3.9	17世紀後半～18世紀	口 2/3 底 完存
	232	X35Y2			10.6	6.0	3.9		ほぼ完形
	233	X34Y2			11.5	5.6	3.9		ほぼ完形
	234	X35Y4			6.9	4.3	3.3		1/6
	235	X39Y2・3			7.9	4.7	2.6		2/5
	236	X30Y2	瀬戸		13.3	6.6	5.9		口 1/8 底 完存
	237	X39・40Y2・3	肥前		14.8	4.6	8.0	18世紀～19世紀	口 1/12 底 1/2
	19図	241	早桶 04	早桶	側板	(48.1)			墨書「享保十四年(1729) 芳安童子位 八月十四日」梵字
242		早桶 04	早桶	底板	35.2	35.6	1.4	墨書 梵字	
243		早桶 04	木製品	横櫛	4.6	10.0	0.9		完形
244		早桶 04	木製品	漆器椀	8.0	2.5	3.7	内面赤漆 外面黒漆 銀・赤彩	完形
245		早桶 04	木製品	数珠					
246		早桶 04	古銭					「寛永通寶」文銭 被熱	
247		早桶 04	古銭					「寛永通寶」文銭 被熱	
248		早桶 04	古銭					「寛永通寶」文銭 被熱	
249		早桶 04	古銭					「寛永通寶」文銭 被熱	
250		早桶 04	古銭					「寛永通寶」文銭 被熱	
251		早桶 04	古銭					「寛永通寶」文銭 被熱	
252		早桶 04	古銭					「寛永通寶」文銭 被熱	
253	早桶 04	古銭					「寛永通寶」文銭 被熱		
254	早桶 04	古銭					「寛永通寶」文銭 被熱		
255	早桶 04	古銭					「寛永通寶」文銭 被熱		
256	早桶 04	古銭					「寛永通寶」文銭 被熱		
257	早桶 04	古銭					「寛永通寶」文銭 被熱		
20図	258	早桶 04	木製品	鍬	35.1	1.1	0.3	ミニチュア	
	259	早桶 04	木製品	鍬	12.9	5.4	0.3	ミニチュア	
	260	早桶 04	木製品		5.7	3.9	0.3		
	261	早桶 04	木製品		5.3	3.9	0.2		
	262	早桶 04	木製品		9.7	6.4	0.6		
	263	早桶 04	木製品		9.2	6.3	0.7		
	264	早桶 04	木製品		9.6	2.2	0.4		
	265	早桶 04	木製品		9.4	2.0	0.3		
	266	早桶 04	木製品		9.7	2.2	0.3		
	267	早桶 04	木製品		21.1	3.1	0.3		
	268	早桶 04	木製品		22.7	2.3	0.3		
	269	早桶 04	木製品		21.1	2.9	0.3		
	270	早桶 04	木製品	折敷	6.0	19.0	0.6		
	271	早桶 04	木製品		25.9	1.5	0.7	木釘	
	272	早桶 04	木製品		22.4	1.6	0.4		
	273	早桶 04	木製品		21.9	1.6	0.3	木釘	
274	早桶 04	木製品		22.0	1.6	0.6			
275	早桶 04	木製品		21.2	1.6	0.3			
276	早桶 04	木製品		46.6	2.0	0.4			
277	早桶 04	木製品		9.2	2.2	0.2			
278	早桶 04	木製品		20.0	1.1	0.7	墨書		
279	早桶 04	木製品		26.1	1.7	0.5			
280	早桶 04	木製品		26.4	7.0	0.5	木釘		
281	早桶 04	木製品		23.1	1.8	0.6			
282	早桶 04	木製品		23.6	1.8	0.4			

※法量の単位はcm 口：口縁部 底：底部

図版	No	遺構・出土区	種類	器種	口径	器高	底径	備考	残存量
					(長さ)	幅	(厚さ)		
20図	283	早桶 04	木製品		22.8	2.1	0.8		
	284	早桶 04	木製品		23.3	2.1	0.6	木釘	
	285	早桶 04	木製品		23.2	1.9	0.4		
	286	早桶 04	木製品		23.0	2.1	0.3		
	287	早桶 04	木製品		26.9	1.4	0.3	木釘	
	288	早桶 04	木製品		21.5	1.5	0.5	木釘	
	289	早桶 03	木製品	鉢	14.4	6.8	0.4	柄の長さ 31.1cm	
	290	早桶 03	木製品		9.4	3.2	0.6		
	291	早桶 03	木製品	数珠					
	292	早桶 05	木製品		10.2	7.1	3.5		
	293	早桶 05	木製品		15.3	5.0	0.6	木釘	
	294	早桶 06	木製品	漆器椀	9.8	4.1	4.7	内面赤漆 外面黒漆 銀彩	ほぼ完形
21図	295	早桶 07	早桶	側板	74.5		0.6	墨書 梵字	
22図	296	早桶 07	早桶	蓋板	56.0	52.4	0.8	墨書 梵字 木釘	
	297	早桶 07	早桶	底板	43.8	44.0	1.8		
	298	早桶 07	木製品	数珠					
	299	早桶 07	古銭					「寛永通寶」被熱	
	300	早桶 07	古銭					「寛永通寶」被熱	
	301	No28	石製品		35.5	37.5	7.7		
	302	No28		骨壺	29.6	41.1	13.5	糸切り 鉄釉	完形
	303	No28	木製品	柄杓	6.3	6.4	2.2	柄の長さ (19.6cm) 赤彩?	
	304	No28	木製品						
	305	No28		鈴					
	306	No28			10.6	9.8	6.7		
	307	No28	古銭					「寛永通寶」	
308	No28	古銭					「寛永通寶」		
309	No28	古銭					「寛永通寶」		
310	No28	古銭					「寛永通寶」		
311	No28	古銭					「寛永通寶」		
312	No28	古銭					「寛永通寶」		
23図	313	No3		蓋	10.5	2.7	4.6	糸切り 墨書 梵字	口 1/4 底 完存
	314	No3		骨壺	9.4	15.3	10.3	糸切り 墨書 梵字	ほぼ完形
	315	No3			4.3	4.3	0.7	糸切り	完形
	316	No3			3.0	1.9	3.4	糸切り 墨書 梵字	完形
	317	No5		蓋	10.3	2.4	4.8	糸切り 墨書 梵字	口 1/8 底 完存
	318	No5		骨壺	9.3	11.0	8.2	糸切り 墨書	3/4
	319	No5			4.5	4.8	0.5	墨書 梵字	完形
	320	No5			4.0	2.7	4.0	糸切り	完形
	321	X30Y2		骨壺	10.8	13.8	12.6	糸切り 墨書	ほぼ完形
	322	X30Y2			3.8	0.6	3.2	糸切り 墨書 梵字	ほぼ完形
	323	X30Y2			3.7	2.0	3.3	糸切り	完形
	324	X30Y2	古銭					「寛永通寶」	
	325	X30Y2	古銭					「寛永通寶」文銭	
	326	X30Y2	古銭					「寛永通寶」文銭	
	327	X30Y2	古銭					「寛永通寶」	
	328	X30Y2	古銭					「寛永通寶」	
	329	X30Y2	古銭					「寛永通寶」	
	330	X30Y2	古銭					「寛永通寶」	
	331	X30Y2	古銭					「寛永通寶」	
	332	No24		蓋	14.0	3.9	4.8	糸切り 墨書 梵字	口 7/8 底 完存
333	No24		骨壺	14.4	22.2	14.0	糸切り	完形	
334	No26		蓋	13.5	3.7	5.5	糸切り 墨書 梵字	口 1/4 底 完存	
335	No26		骨壺	13.1	21.5	14.2	糸切り	ほぼ完形	
336	No26			3.6	2.4	3.5	糸切り	完形	
337	No22		蓋	15.4	3.6	6.1	糸切り	口 1/2 底 完存	
338	No22		骨壺	13.9	20.7	13.2	糸切り	ほぼ完形	
339	No22			5.4	0.7	3.1	糸切り 墨書 梵字	2/3	
340	No22			4.7	1.8	2.7	糸切り	完形	
24図	341	No14		蓋	14.4	3.5	4.8	糸切り 墨書 梵字	口 1/2 底 完存
	342	No14		骨壺	13.2	23.2	12.4	糸切り	口 3/4 体～底 完存
	343	No14			4.3	0.7	3.4	糸切り 墨書 梵字	完形
	344	No14			4.3	2.0	3.5	糸切り	完形
	345	No14	越中瀬戸	皿	9.3	2.9	3.1	糸切り 鉄釉 重ね焼	口 1/4 底 完存
	346	No14	古銭					「寛永通寶」文銭	
	347	No14	古銭					「寛永通寶」文銭	
	348	No14	古銭					「寛永通寶」文銭	
	349	No14	古銭					「寛永通寶」文銭	
	350	No14	古銭					「寛永通寶」文銭	
	351	No14	古銭					「寛永通寶」文銭	
	352	No21		骨壺	10.7	12.5	10.9	糸切り	口 1/12 体～底 完存
	353	No21			5.0	0.8	4.1	糸切り	1/3

※法量の単位はcm 口：口縁部 底：底部 体：体部

図版	No.	遺構・出土区	種類	器種	口径	器高	底径	備考	残存量
					(長さ)	幅	(厚さ)		
24図	354	No.21			4.4	2.0	3.3	糸切り	完形
	355	No.9		蓋	13.5	3.2	4.1	糸切り	口 1/2 底 完存
	356	No.9		骨壺	13.9	25.7	12.8	糸切り 墨書 梵字	口 1/2 体～底 完存
	357	No.9			4.6	0.7	3.4	糸切り	完形
	358	No.9			5.1	2.3	3.7	糸切り	完形
	359	No.18		蓋	14.4	4.0	5.2	糸切り 墨書 梵字	口 1/8 底 完存
	360	No.18		骨壺	14.0	22.8	13.3	糸切り	口 3/5 体～底 完存
25図	361	X27Y2	石製品		18.3	19.4	13.5		
	362	カクラン	須恵器	坏	12.0	(2.4)			破片
	363	X28Y2	須恵器	坏			6.9		底 1/4
	364	X35Y3・4	須恵器	坏			8.4		底 1/4
	365	排土	須恵器	坏			10.3	外面煤付着	底 1/4
	366	X10Y2	須恵器	横瓶				外面自然釉	破片
	367	X26Y4	珠洲						
	368	X39Y2	珠洲	甕	19.3				口 1/4
	369	カクラン	珠洲	片口鉢			10.4		底 1/5
	370	X40Y2	珠洲	片口鉢			10.0	糸切り	底 1/3
	371	X33Y2	越中瀬戸	皿	10.1	2.5	3.8	糸切り 鉄釉	口 1/2 底 完存
	372	X27Y3	越中瀬戸	皿	10.2	2.7	4.3	灰釉	口 1/2 底 ほぼ完存
	373	X26・27Y1・2	越中瀬戸	皿	10.4	2.6	4.7	灰釉	口 1/3 底 2/3
	374	X33・34Y1・2	越中瀬戸	乗燭	3.3	1.9	3.0	糸切り 鉄釉 内面タール付着	完形
	375	X35Y1・2	越中瀬戸	乗燭	5.1	3.3	3.2	糸切り 鉄釉	完形
	376	X39Y2	越中瀬戸	乗燭	5.3	3.7	3.5	糸切り 鉄釉 内面タール付着	完形
	377	X33・34Y1・2	越中瀬戸	乗燭	5.1	4.3	3.3	糸切り	完形
	378	X35Y1・2	越中瀬戸	乗燭	5.9	4.7	3.8	鉄釉	完形
	379	X26・28Y2・3	越中瀬戸	乗燭	6.3	5.3	4.4	糸切り 鉄釉	ほぼ完形
	380	X30Y4	肥前		5.9	4.3	2.7	18世紀	完形
	381	X28Y4			8.9				口 1/3
	382	X37Y4	肥前		4.6	5.6	4.2	17世紀後半～18世紀	完形
	383	X39Y27					7.6		底 1/4
	384	X39Y27			18.1	9.6	7.8		1/4
	385	X33Y2			8.4	5.6	4.4		1/4
	386	X5Y4			8.7	6.0	5.1		1/3
	387	X25Y4			8.7	9.2	5.2		3/4
	388	X37Y2			10.2				口 1/2
	389	X33Y2							
	390	カクラン		瓦					破片
	391	X5Y2	瓦質土器	火鉢	11.9				
	392	カクラン							

※法量の単位はcm 口：口縁部 底：底部 体：体部

附章 高寺遺跡から出土した木製品の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

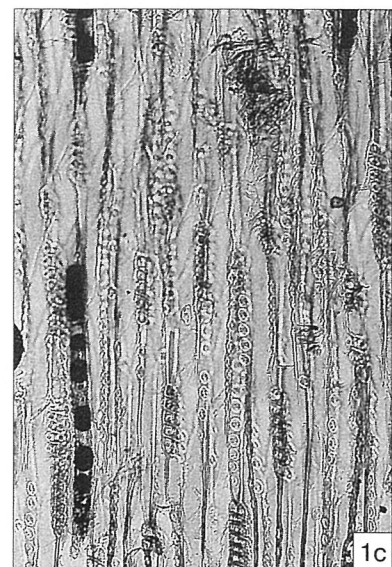
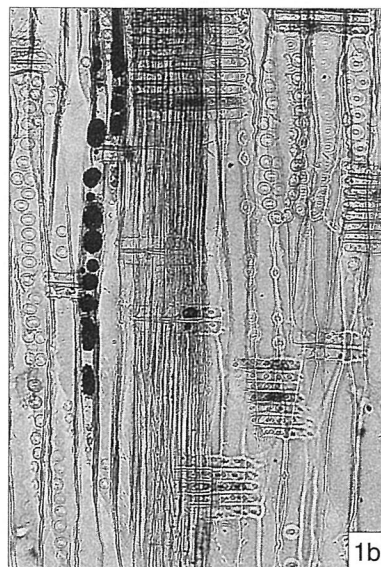
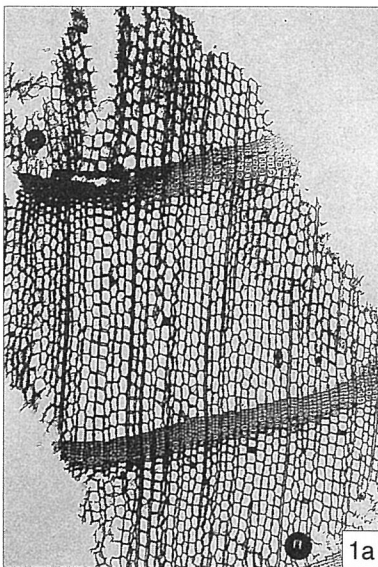
1. 高寺遺跡出土材の樹種

はじめに

高寺遺跡では、平安時代の遺構・遺物が検出されている。このうち、井戸（SE01）では井戸枠が遺存していた。本報告では、井戸枠の樹種を明らかにし、用材に関する資料を得る。

1. 試料 試料は平安時代の井戸（SE01）の井戸枠1点（試料番号1）である。
2. 方法 剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。
3. 結果 井戸枠は、スギに同定された。主な解剖学的特徴を以下に記す。
 ・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科
 早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞は晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか、分野壁孔はスギ型で2～4個。放射組織は単列、1～15は細胞高。
4. 考察 井戸枠はスギであった。同様の事例は、これまでも多数報告されており（島地・伊東1988）、今回もその一例といえる。スギが利用された背景としては、加工が容易であること、古くからスギ材の入手が容易であったこと等が挙げられる。

引用文献 島地 謙・伊東隆夫編（1988）日本の遺跡出土木製品総覧、296p、雄山閣



1. スギ（試料番号1）

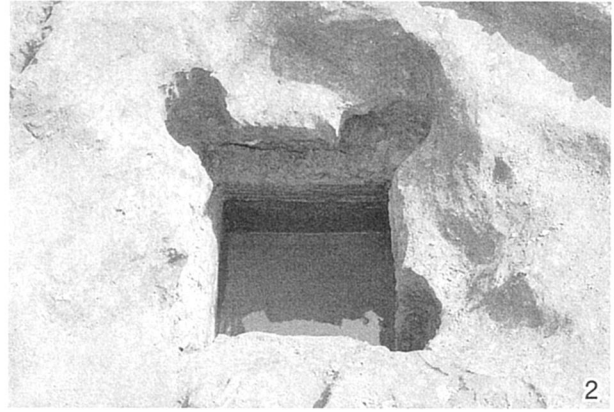
	試料番号	断面	撮影倍率	図版・写真番号
a: 木口	1	木口	12.5	1-1a
b: 柁目	1	柁目	31.25	1-1b
c: 板目	1	板目	31.25	1-1c

200μm : a
 200μm : b、c

図版 1



試掘1トレンチ（北から）



1トレンチ SE01検出



試掘2トレンチ（北から）



2トレンチ 礫出土状況



発掘区全景（北から）



SX03 遺物出土状況



SD53 遺物出土状況



SK34 遺物出土状況



X33~38Y 2~4区 検出遺構



SD28の土層



SD28 遺物出土状況

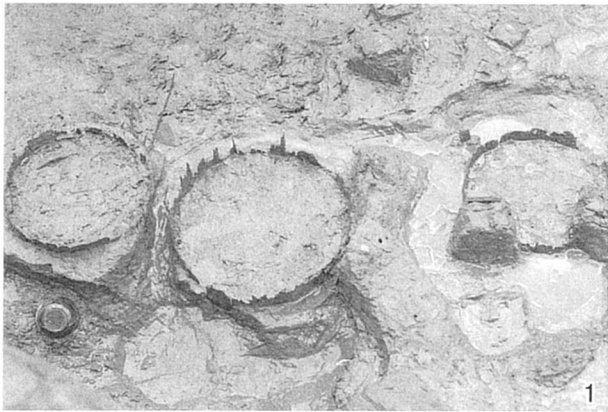


SD35の土層

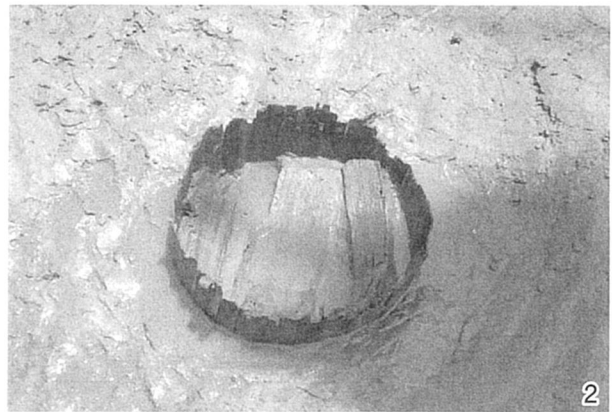


SD35 遺物出土状況

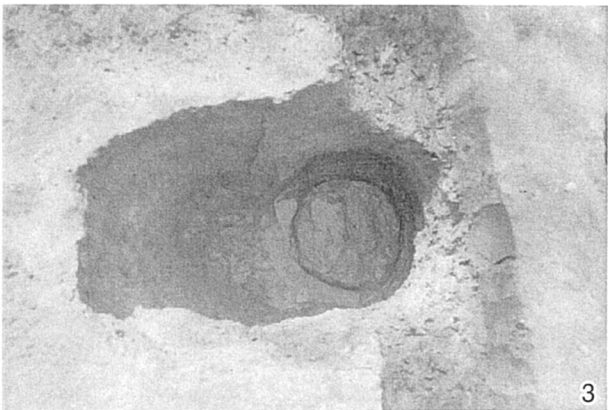
図版 3



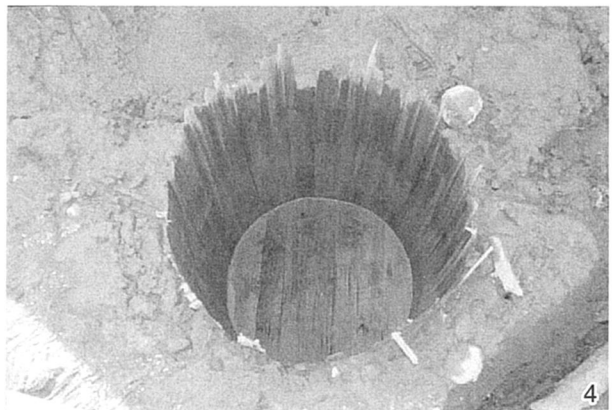
早桶検出状況 (左から05・04・03)



早桶03



SK35



早桶04



SK59



SK43



SK46



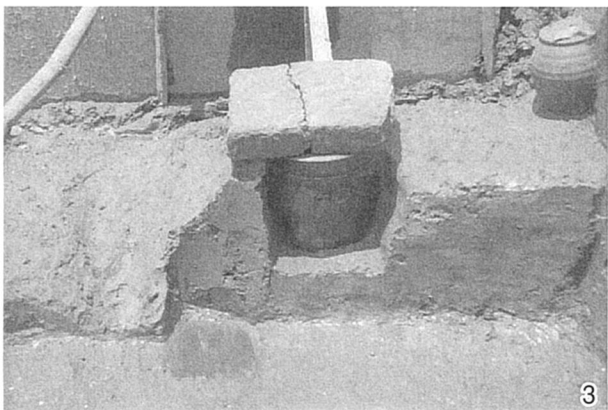
早桶07



X25・26Y 3・4区 遺物出土状況



SK24



骨壺 (No.28)



SK14



SK10



SK13



SK15



SK41

図版 5



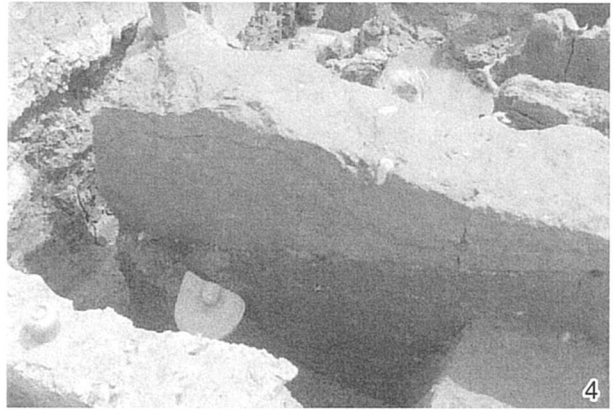
SD01 調査状況



SD01の土層 (A-A' セクション)



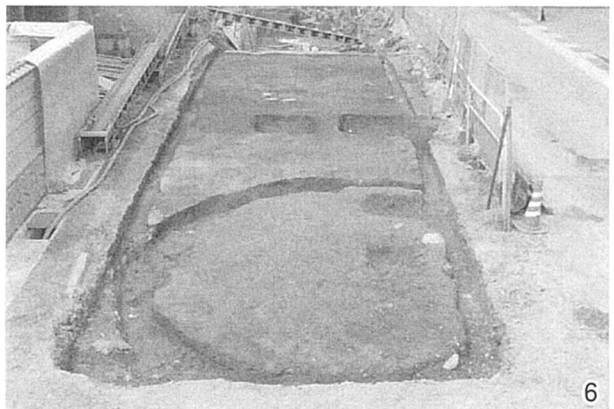
SD01 遺物出土状況



SD01の土層 (B-B' セクション)



SD01 遺物出土状況



X10~15Y2~4区 遺構検出



X4~10Y2~4区 遺構検出



寺の入口付近の土層 (X3Y2・3南壁北面)

報告書抄録

ふりがな	たかであらいせきはつくつちようさがいよう							
書名	高寺遺跡発掘調査概要							
編著者名	原田 義範							
編集機関	小杉町教育委員会							
所在地	〒939-0393 富山県射水郡小杉町戸破1511 TEL 0766-56-1511							
発行年月日	西暦1998年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
たかであら 高寺	とやま いみず こすぎ 富山県射水郡小杉町 さんが ちゃのき 三ヶ字茶ノ木	16381	020	36度 43分 13秒	137度 06分 14秒	試掘調査 19960805～ 19960809 19960904～ 19960913 本調査 19970418～ 19970730	57㎡ 50㎡ 651㎡	都市計画街路 太閤山・稲積 線道路改良事 業に伴う事前 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
高寺	集落	弥生	溝	弥生土器・土錘				
		古代	井戸・溝・土坑	須恵器・土師器・緑釉陶器 木製品（井戸側板・柄杓・ 櫛・桶底板）		平安期の井戸から まとまって土師器 坏の完形品が出土		
		中世	溝・土坑・柱穴状ピット	青磁・珠洲・土師質土器・ 瓦質土器・渡来銭				
		近世	埋葬施設・溝・井戸	早桶・骨壺・古銭・越中瀬 戸・漆椀・櫛・数珠・錫杖・ 五鈷杵・折敷・伏鉦				

高寺遺跡発掘調査概要

平成10年3月24日

編集 小杉町教育委員会

発行 〒939-0393

富山県射水郡小杉町戸破1511

電話：0766-56-1511

印刷 日興印刷株式会社

